女鑑

廿八年三月十八日發行

第八十二號

東京國光社

女鑑第八十二號目次

阿茶局



歴史學の應用

吾人の、常に、女鑑に於いて、歴史學の必要を論ふものは、その應用の、最、必要なるを以てなり。人倫日用の道は、盡、歴史に存し、成敗禍福の標準は、盡、歴史に詳なり。されば、深く、之を講究して、之を、實行に應用せば、この學の効、實に、百科の學に冠絶せるを知らん。殊に、後來、人の母となるべき婦人女子に、最、必要缺くべからざるものは、亦、この學なり。

夫、歴史は、其の記述の範圍の廣大なること、實に甚しく、就中、古聖往賢の實踐躬行せられたる嘉言善行を詳記密述せるものなれば、後來、國民を養成發育

するに於いて、その歴史上にあらはれたる言行を採擇し、以て、教導訓諭するより良善なるはなし。されば、人の母たるべき女子にして、歴史學を修めざるべからざるは、無論のことにあらずや。

故に、女子の學修すべき學科の種目多しと雖、吾人は、最、力を、歴史學に用ゐん事を希望して止まざるものなり。世の諸嬢、能く、我が國の歴史を研究し、以て、完全無缺なる國民を養成發育せんことを勉めよ。これ、誠に、今日の急務なり。

抑、今回、征清の擧あるに際し、戰へば勝ち、攻むれは取り、勢、疾風の、霜葉を拂ふが如きもの。上は、將校より、下は、下士兵卒に至るまで、克く忠に、克く勇に、奮戰力鬪して、能く、我が國威を、中外に宣揚したるものは、固より、至

仁英武なる　至尊の威靈に由ると雖、亦、實に、我が國、幾千萬年來の歷史の涵養によりて、此の如く、偉大快絕なる功績を奏せしもの多しといはざるべからず。

是に由りて、之を觀れば、歷史の功績は、誠に、赫著なるものなり。故に、女子は、之を修め、之を學び、後來の國民を養成發育するに於いて、歷史學の科程、最、必要なること明ならずや。

而、征淸の事、未、局を結ぶに至らず。今後、いかに、形勢の變易するや、亦、知すべからず。假令、征淸の事局は、猶、數月の後、或は、終結を見るに至るあらんも、將來、又、如何なる事變の生ずるや、必すべからず。其の際に當りて、又、忠勇無雙の國民あらば、則、今日輝かしたる國威をして、愈、益、發越光耀せ

しめ、以て、我が大八洲國の體面を維持すること、決して難からざるなり。故に、婦女子は、歷史學を修め、誘導教養、忠勇の人物を養成し、以て、將來ヽ備ふる精神なかるべからず。是、吾人が、婦女子をして、歷史學を研精せしめん事を希望する所以なりとす。世の諸孃、夫、奮ひて、この歷史の應用といふ事ヽ注目せられよ。

終りに臨みて一言せん。外邦の歷史は、決して、我が國史と同一視すべきものに非ず。然れども、之を觀て、以て、其の人種風俗の異なるを明ヽするは、其の見界を廣くし、我が國の尊嚴を知るヽ足れり。故に、彼を知らん一助として、可なり。近來、國史を、萬國史と、同列の史學に入るゝものあるは、吾人の、斷じて取らざる所なり、諸孃、亦、能く、之を察すべし。

論説

音藝、花生、及茶の湯に就いて（下）

高津鍬三郎

前にも述べたるが如く、女子が、その學ぶところの學藝に就いて、その力の大半を費すものは、琴、三味線等の音藝に在るが如し。而して、この音藝の効果如何といふに、余は、その利をみるよりも、その害をみること多しといはざるべからず。また、その害をみざるも、その利を見ること、少しといはざるべからず。また、今日、之を、その女に學ばしむる父母にありても、多くは、能くも、其の利害を詳にせず、たゞ、おのれが、近邊の女子も、親戚、朋友の女も、概ね、みな、

之を學べば、おのれの女も、また、之を學はしめざるべからずとて、習はすまあらずば、徒に、父母の慰みとせんが爲の物數奇のみ。そは、とまれ、かくまれ、父母の注意と、おのれの勉強とに因りて、多少習ひ得たる音藝は、その巧拙は、暫く、之を措き、遂に、何の用をか爲す。これ、余の、主として、世の女子を有する父母に問はんと欲するところなり。それ、女子の、未、嫁せざるや、その父母の、之を愛すること甚しきものは、眞誠なる敎育をも施さずして、殆、之を、翫弄物視し、女子は、未、その未來に於ける一身の利害を考ふる智識なければ、たゞ、父母の命に隨ひ、且、世人の顰に倣ふのみ。然れども、能く思へ、女子の本分は、妻たるにあらずや。而して、妻となりては、衣食の世話、其の子の敎養は、いふまでもなく、常に、家内の愉快を計り、夫の心を慰め勵まして、專、外

事に、力を盡すことを得しめざるべからず。この手段としては、音藝の如きも、一要素たるには相違なきも、今日、我が國の有様にては、人の妻として、その家内、娯樂の爲に、はた、また、その夫の心を慰めんが爲に、或は、琴を彈き、或は、三味線を弄する者、幾何かある。よし、あるとても、極めて少數なるべし。既に、子女を有する者に至りては、全く、かゝることなしといふも、不可なからん。それ、春に當りて、種子を下すは、秋獲を見んが爲なり。人、幼にして、藝を學ぶも、また、之にひとしく、長じてのち、役にたゝしめんが爲にあらずや。而して、音藝の如き、女子の本分を盡す上に於いては、殆、役に立たざること、かくの如し。しかも、なほ、主力を盡して悔いざるは、あに惑へるの甚しきものならずや。

さて、琴、三味線などと、同じ部類に屬すべきものにして、割合に、世人の注意をひかざるものは、花生け、茶の湯、その外の諸禮式なりとす。花生けの如きは、最、女子の技藝として、適當なるのみならず、室内の一大裝飾となりて、家内の者は、いふもさらなり。來客の目をも喜ばしめ、また、自身の心目をも樂ましむるに足る。而して、多くの費用を要せざれば、何人も、之を樂とすることを得るなり。人、或はいはん。君がいふところは、實際ならず。その器物といひ、また、その材料といひ、費用少からずして、これほど、贅澤なるものなしと。余は、之に答へて云はんとす。そは、實に、花生けの趣味を解せざる者の言のみ。その器物の如き、花卉の如き、いづれも、在るに任かせて用ふれば可なり。能く、之を用ふるを、上手といひ、あしく、之を用ふるを、下手といふ。

術の巧拙は、器物、花卉の善悪には關せざるなり。而して、その樂とすべきところは、實に、その技術に在りて、その器物にはあらざるなり。故に、いかはど、結構なる器物といへども、之を、あしく用ふれば、たま〳〵以て、笑ひ種となるのみ。實に、生け花の術は、單に、人の目を樂ましむるのみならず、優美の思想を養成し、人品を高むるに足れり。次に、茶の湯に至りては、一層、實用に近く、その效用の廣くして、且、大なるを見る。世人、或は、茶の湯を、贅澤の極の如くに云へど、これは、茶の湯の性質を、詳にせざるより起りたる誤解なりとす。茶の湯は、實に、饗應の、極めて質素なるものなり。その使用する器物の如きも、揃ひたるものを用ひず、在るに任かせて、之を應用するのみ。世の茶人と稱する者の、徒に、金錢を費して、珍器奇物を求むるが如きは、茶道の本

旨に背けるものなり。世には、その道を詳にせざるよりして、妄に、その作法の面倒なることをかこち、その飲食物の、口に適せざるを難ずれども、實際、その作法は、清潔を旨として、飲み、且、食ふには、最、順序よく、最、簡便に出來たるものなりといふ。實に、茶の湯の妙味は、器物、及、食物應用の一點にあれば、其の饗應をうくるものは、食品の善悪を問はずして、その鹽梅と、取合せとに注意して、主人の心を用ひたるところを察し、精神上の風味をも賞味せざるべからず。そは、兎まれ、角まれ、いさゝかにても、茶の湯を稽古したる効能は、起居の動作、優美になりて、人品を高くし、用意、周密になりて、器物を扱ふにも、鄭重となり、清潔を重んじ、質素を尊ぶ風習となるなど、妻として、一家を治むる上に、必要なること多し。然れども、從來、生花、茶道等を以て、

專門に教授せる者は、もとより、その家業となし、糊口の資とせるが故に、舊式を墨守して、變通を知らざるのみならず、不見識にして、骨董商人に類せずんば、幇間者流に近き者多し。故に、表面の作法のみを教へて、その趣意を傳ふること能はず。これが爲に、世用を爲すものたることを知らしめず、却りて、世人を煩はすものとおもはしむ。悲いかな。余は、世の父母たる者が、その女を教育するに當り、虚心平氣に、音藝、生花、茶道等の利害得失を詳にして、程能く、その力を用ひんことを希望する者なり。

美貌の秘訣

坂本三七郎

東隣の阿孃は、曲眉にして豐頬、西家の阿妹は、嬌口にして便體、互に、妍を評

し、麗を品す。況、其の衣裳の美を欲して、時樣を競ひ、朝に、綠衣を購ひ去て、夕に、紅裳を求む。是、世上女性の常にして、古人の謂ゆる、女は、己を喜ぶ者の爲に、容くる者なり。婦女子の、容貌を飾り、美衣を好むは、天性然り。啻に、己を喜ぶ者の爲に、然るにあらざるなり。男子の性は、夫、尚、秋の如く、嚴正肅殺の氣を帶び、女性は、春風、野に滿ちて、駘蕩たるが如し。櫻障桃屏、天地の美を飾り、華を裝ふ。天地の化、春秋ありて、造化の妙機、男女、性を異にす。婦女子の、美貌麗衣を欲する、吾人は、之を難ぜずして、之を贊する者なり。

世に、女性にして、容貌を飾ることを欲せず、鬢髮、蓬然として亂れ、衣服、垢汚して、意に介せざる者あり。就中、當世の女流中、多く、其の人あるを見る。

吾人は、甚、之を諱む。是、其の性を狂け、其の天に背く者なり。其の性を狂け、天に背く者、必、其の心は、春風和煕の氣なくして、愛すべき女德を失ふを知る。然れども、吾人は、其の衣裳を、金玉にし、其の顔貌を、黛綠にし、艷冶ならしめんと謂ふにあらず。端麗愛すべく、清雅仰ぐべき態度を裝成せんことを勸むるなり。女德の高下は、其の人の容貌、態度を見れば、之を知るを得べし。願はくは、讀者諸孃、容姿を飾るも、艷なる勿れ。衣服を裝ふに、清雅なれ。決して、冶様なる莫れ。今世の婦女子を見るに、一は、無貌無姿の極に馳すると、一は、艷態冶様の卑風に流るゝとの兩端に在り。吾人は、之を矯揉して、中に歸せしめんことを願ふ。女鑑讀者の諸孃、何ぞ、之を救正する法を爲さゞるや。

吾人は、既に、衣服、態度の清雅にして、端麗ならんことを望めり。更に、諸孃に、美貌の秘術を傳へん。女子、世に生る、醜あり。美あり。花顔、玉肌は、人、皆、之を欲し、顔、無鹽の如く、體、板額の如き、人、皆、之を嫌ふ。然れども、是、天なり。變せしむること能はず。然れども、吾人に、秘術あり。曰はく、其の徳を、貞恒にして、其の心を、端正にし、而して、其の服裝、態度を、清雅にする、是、極秘要訣なり。若、之を能くせは、美の前に、美なく、醜の前に、醜なく、唯、一の成徳圓滿の天女神人を拜せんのみ。古來、貞女烈婦を見るに、吾人は、其の徳の高きを聽く。其の容顔の美醜を評せしを知らず。女徳の一段に至りて、醜美、又、一の價値なきを知れ。小楠公の母の容姿は、後世、評せしなく、唯、持佛堂に、兒の刀を奪ひて、泣諫せし賢婦人を見る。孟軻の母

が、機を斷ちて、軻を戒むる圖は、端正の容、温良の顏、決して、巧笑媚嫵の姿を見ず。然れば、則、醜女、恥づるを休めよ。美婦、驕るを休めよ。一天高き所、女德の香風に浴する人、美の極なり。妍の粹なり。諸孃に與ふる秘訣は、一に是あるのみ。諸孃、何ぞ、疑を用うるを要せん。

常に、心を用うるに、端正、體を行ふに、清雅なる時は、高尚の風神、態度、自然に現れ、卑猥にして、態姿、艶冶なる時は、又、其の言行の間に發する者なり。然れども、是、一朝一夕の能くする所にあらず、心を持する、正しく、身に行ふ。久しうして、始めて得べし。所謂、德は、身を潤し、玉を懷ける石、自、光澤あるが如し。之を例せば然り。妓女、娼婦は、世の所謂、墻花、路柳にして、節操なき者、其の顏貌の美なる、花の如く、月の如く、其の衣裝の華麗な

る、錦を裁し、繡を織る。然れども、一見して、其の卑猥の姿、艶冶、人に媚ぶる容は、人をして賤ましむ。此の如き者は、何ぞや。其の心、誠に輕うして、其の情、誠に卑ければなり。心、既に、此に在り。發して、容姿に現はるゝ、彼が如し。愼むべきは、其の平生、涵養の德性にあるかな。又、彼の雲上、月臺に在る人を見ずや。王侯、將相の子女と雖、豈、種あらんや。顏貌、市井の女兒に恥づる者ありと雖、其の之を望みて、慕ふべく、敬ふべき態度ありて、人をして、其の醜たるを忘れしむるにあらずや。吾人は、是に於いて、醜美を競ひ、妍媸を爭ふは、婦女子の常なりと雖、願はくは、一段の高德を養ひて、美は、益、美に、醜は、其の醜たるを忘れしめんことを欲す。美貌の秘訣、吾人、何ぞ、諸孃を欺かん。

女子處世論（承前）

三輪田眞佐子

第十六　女子安心の道

先哲いひけらく、女子に、三從の務ありと。今人、これを難じていふやう、娘の、家にあるとき、親に從ひ、妻の、嫁ぎしのち、夫に從ふは、勿論のことなり。夫死にしのち、母にして、子に從ふべしとは、不通の論なりと。おのれも、かく思へり。蓋、西洋、及、東洋ともに、古は、女子を物品視し、賤めたることは、掩ふべからずといへど、歲月の移り更るにつれ、人の思想にも、亦、變遷あるべければ、古書を讀むもの、宜しく取捨すべきなり。さなくば、時世に適合すべきやう、有益に解すべきなり。まして、三從の一なる、夫死にて、子に從ふとは、母の、子に從へよとの意にあらずして、文句の、簡單に過ぎたるもの、所謂、

語弊なるをや。

おのれは、今、親子は、分體なり。夫婦は、陰陽なり。されば、女子の、親、あるは、夫に從ふは、自然なりといふ根本の道理は、自、明のことなるをもて、敢て、喋々せじ。唯、その結果の點より、聊のべん。抑、人は、母の養育をうけ、父の保護によりて、成人するものなれば、苟、父母に從はざらんか。魚の、水を離るゝに等しからん。故に、女子は、その教育の方針より、良人を撰ぶことに至るまで、總て、父母に從ふべきなり。されど、自由結婚論者の輩は、これを、陳腐せる古言と言はんか。若、斯く思ふ女子あらば、自、實驗して後、最後の心事を、同胞の女子に說きね。

良人と、妻とは、恰、一體の如きものなれば、夫婦の間には、殆、彼我の別ある

ことなし。さらば、妻の、夫に從はざるは、乃、手足の、體軀に從はさるに異ならず。などか、不幸ならざらむ。わが國の女子は、古より、橘媛の、夫君のためなれよかしと、心を定めて、海に、身を投げ給ひける如く、總て、妻は、一身を、夫に捧ぐる覺悟あらざるはなし。されはこそ、夫婦、相和し、施いて、海内平穩なれ。思ふに、一國の口碑、傳說は、おのづから、國民の氣質を左右するものなり。故に、これらは、好し、事實ならずとも、亦、敎化に、與りて力あるものなり。わが國に、望夫山あり、山に、望夫石ありといふ。そは、昔、夫婦睦しく住みけるに、夫、軍に隨ひて、遠く行きければ、妻、之を慕ひて、子を負ひしまゝ、化石となりしなりとぞ。されば、わが國の妻が、夫に對する服從心の深きは、偶然ならず。これぞ、日本婦人の特得なる。

世人の批難するところの、子に從ふとは、如何なる意味か。おのれ、これを解して、母は、子に、家業を委ぬべしとの意味なりとせん。元來、女子は、内事を、主務とすべきことなれば、勢、世事に迂からむ。然るに、夫死して後、子は、成人せるにもかゝはらず、なほ、母が、世事を主宰するは、策の得たるものにあらざれば、子に讓るべしとなり。殊に、古の婦女は、教育もて、智能を琢かざりしをもて、おのづから、男子よりも、不能者視せられしならむ、否、今日とても、教育なき女子は、同等の結果を受けさるべからず。あはれ、鑑みるべきことにこそ。蓋、子ばかり、親のよすがとなるものは、他にあらじ。古歌に、「ことゝはぬ木すらいもとせありといふをたゞ獨子にあるが苦しさ」とあり。誰か、これに、同情を表せざらん。最早、區々たる從の一字は、いはずもがな。

以上の如く、女子の生涯は、和從するを以て、安心の道となすべきなり。されど、雲起りて、月を掩ひ、風吹きて、花を散らすは、世の常なり。若、女子たるもの、父、夫、あるは、子のみを、永久に恃むは危し。故に、よし、獨立する精神は、毛頭、なくとも、獨立するゝ足る力量はなきときは、一朝、不慮の事に逢ひて、忽、墮落するならん。見よ。良人亡せる如きことあらんに、豫、獨立するに足る力量なからんか。そのもの、富貴の婦なれば、家名を維持すること能はずして、祖先を辱め、貧賤の女なれば、自活して、孤を養ひ、家の再興をなすこと難し。亦、かゝるほとの力量なき女子は、常時に於いてさへ、是非を判別する心なく、唯、柔弱ゝ、歲月を送るのみにして、良人を諫め、子孫を戒むべきことを知らざるべし、誠に、女子敎育の必要、この點にあり。誤り給ひ

ぞ。おのれ、ことにいはんとす。和從とは、無神經的の、唯々、諾々にあらざるなりと。

この一篇は、さいつ頃、おのれが、日本弘道會婦人部のためになしゝ談話の原稿なれど、女子の處世上、肝要のことゝ信じ侍れば、こゝに載せつ。

史談

阿茶局

大町桂月

元龜、天正の前後は、我國にて、最も多く、英雄豪傑の輩出せし時代なり。豊臣秀吉、德川家康、織田信長の諸公を始めとし、猛將勇士の多きこと、幾んど數ふるに遑あらず。而して、神州の正氣、獨、男子の身に鍾りたるのみならず、女子にも、亦、稱するに足るべきもの、いと多かり。その中にて、勝賴の夫人、忠興の夫人の如きは、逆境に處して、よく其節を守りたるものゝ、著しき例なり。阿茶局の如きは、順

境に處して、よく其分を盡したるものゝ、著しき例なりけり。
德川家康公は、よく人を用ひたまへり。家康公は、又、男子の特に長ずる所と女子の特に長ずる所とを識別して、男女共に、己れの用を爲さしめたまへり。即、男子にして、帷幄の臣には、本多正信、大久保忠隣などあり。材武の士には、本多忠勝、井伊直政、榊原康政などあり。女子にしては、阿茶局、大婆、春日局などあり。春日局の事蹟は、已に、女鑑第廿二號に出でぬ。大婆、事蹟は、また、記する折あるべし。茲には、阿茶局の事を紀せむとす。

春日局が、最もよく其伎倆をあらはして、家康公知遇の恩に酬ひたる功績は、大坂との和睦なりけり。家康公は、如何にともして、豊臣氏を亡ばさむと欲し、大坂方を激せしめ、遂に兵をあぐるに至らしめたまへり。兵を擧ぐるに及びて、家康公は、天下の兵を盡して、之を攻めたまへり。時に、慶長十九年なり。されど、大坂城は、天下無双の堅城なり。さきに、織田信長公、一向宗の僧徒の茲に籠れるを攻むること、三年に及びたれど、遂に拔きたまふこと能はざりき。其後、秀吉公、大に修築を加へたまひて、益、堅くなれるに、大坂方の兵力は、僧徒の比にあらざれど、家

康公の機敏におはせる、兵をあげしめ給ふものから、兵力を盡して之を拔かむとはしたまはざりしなり。全力を擧げて攻めなば、たとひ、之を拔きたまふべけれど、かくては、多く、味方の兵を損せむことを憂ひたまひしなり。十二月五日、秀忠公は、一擧して、城を攻めんと主張したまへども、家康公は之に從ひたまはざりけり。家康公は一旦和睦して、而して後、事を圖らむと思ひたまへり。されど、早くも、十一月二十日、本多正純に命じ、織田有樂、大野修理に書を送りて、和を勸めしめたまひけるに、秀頼公は從ひたまはざりき。十二月十日、家康公は、また、後藤光次をして、城に入て、和を說かしめたまひぬ。

此時、城中にても、一旦和睦して後、圖をなさむと欲し、家康公のすゝめに從ひて、和議殆んど成らむとするに至りしが、條件のゆきちがひありて、その和議、忽、やぶれけり。されど、家康公は猶和睦をはからむとて、阿茶局をして、城中に入て、和を說かしめたまひぬ。阿茶局が周旋するに及びて、家康公の熱望したまひし和議、忽、成りけり。家康公の御喜びは、いかばかりなりしぞ。かく、阿茶局が大功を立てしは、時機、自から熟したるにも依れど、その力の非凡たるにあらずんば、いかでか、

此に至ることを得む。家康公已に男子を用ゐ給ひて、事成らず。遂に、女子を用ゐたまひて、事成れり。家康公は能くその用ゆる所を知りたまへるものと申すべし。蓋、男子は剛なる事に適し、女子は柔なる事に適す。されど、城を抜き、將を擒にするは、男子の適する所にして、女子の適する所にあらず。情を說き、和を圖るは、女子の適する所にして、男子の適する所にあらず。大坂の和議、男子の手に成らずして、女子の手に成りしも、偶然にはあらざりけり。かゝる大功を立てし阿茶局は、果して如何なる人なりきや。又、如何なる關係よりして、かく、家康公に重く用ゐらるゝに至りきや。請ふ、余をして、少しく語る所あらしめよ。女子の模範とするに足るべきものあればなり。

阿茶局は、甲州の人、その名をすわ子といふ。武田信玄公の臣、飯田久右衛門といふ人の娘なり。才德、人にすぐれ、家に在て、令名ありけり。信玄公は、今川氏と親戚のよしみありければ、久右衛門に命じて、その娘、すわ子を、今川氏の臣、神尾孫兵衛に嫁せしめたまひぬ。すわ子嫁して、一男を生めり。之を猪之助といふ。此時、家康公は、人質となりて、今川氏のもとにおはしけり。後には、天下の將軍

となりたまひし英雄も、此時は、實に憐れむべき御身の上におはせしなり。今川氏が家康公にあてたる資用は、はなはだ薄く、何事につけても、不十分なりしなり。さるに、すわ子夫婦は之を侮らず、その境遇をあはれみ、心を盡して之に事へまつれり。後日、家康公が大にすわ子を用ゐたまひしは、此時の夫婦が誠に感じて、その恩に酬ひむと欲し給へるに由りしなり。

桶狹の一敗に、今川義元公は、敢なくも戰塲の露と消えたまひ、神尾孫兵衛も討死しければ、すわ子は殘されて、寡婦となり、猪之助は孤兒となりぬ。寄邊のなさに、すわ子は泣く泣くも、その子をつれて、甲州なる實家に歸りけるに、武田家も亡び、その實家も共に亡びければ、賴む木影に雨もる心地して、天下の廣きも、また、親子二人、身を容るゝ處なきに至れり。

是、實に阿茶局が最、不幸なる境遇なりけり。されど、幸にも、武田家亡びたる後、家康公、往て甲州を鎭撫したまひければ、すわ子は、その子をつれ、途に出でゝ拜謁しけるに、家康公は舊義を感じ、喜びて之を入れ、濱松に召して、仕へしめたまふ。すわ子が、さきに施したる陰德、是にいたりて始めて報ひけるなり。

すわ子は、その性さとく、その才、人にすぐれけるが、朝は人より先に起き、夜は人より後に臥し、心をつくし、身を盡し、寸時も怠らず、いとまめやかに事へければ、家康公いたく喜び、殿中の內政は、大小となく、凡て、すわ子にうちまかせ、且つ、此時、阿茶局といふ號をたまひけり。

慶長年間、家康公、駿府に退隱したまひける時も、阿茶局は、猶、從ひまつりて、その內政を掌りけるか、上をうやまひ、下を憐れみ、骨身を砕きて事へければ、上下、おしなべて、其才德をたゝへぬはなかりけり。或時、將軍秀忠公、御父家康公の御機嫌伺として、酒井忠次を駿府に遣はしたまひぬ。

時正に冬の半にして、寒さ堪へ難ければ、綿帽子を被りたるまゝにて、家康公の御前に出でけるに、家康公は之を見たまひて、のたまふやう、本多佐州は、年己に老い、且、我に駿府に事ふるものなれば、綿帽子を被りても可なれども、汝は年老いたるにあらず、且、將軍に事ふる身なるに、かゝる老人の眞似をなすは何事ぞ。江戸は、天下の諸侯の朝する處なれば、將軍に侍するものは、容貌にいたるまで、深くつゝしまざるべからず。若、かゝる無禮のさまなどせば、將軍の威德を損すべし

とて、いたく怒らせたまふ。時に、阿茶局、家康公の側に侍りけるが、忠次の爲に、家康公に謝して申しけらく、きのふ、忠次ぬしは、不幸にも、風邪に冒されけれど、明日は城に上らんことかなひ難しと言ひこされけるを、妾、いさめて申しけらく、御身、このたび、大君の御仰うけて、御機嫌伺ひに來られたれば、一日おくるゝも、御上に對して恐れあり。且、老公の尊慮もはかりがたけれど、綿帽子被られたるまゝにても、登城せらるべしといひければ、此さまにて、拜謁に及びけるなり。この由を聞きわけさせたまひて、無禮の罪、御許あらまほしくなんと申しければ、家康の御心、とけたりとかや。酒井ともいはるゝ名臣が、御叱被るは、ふびんなりと思ひ、わざと、罪を巳に負ひて、忠次をかばひけるなり。かく、頓智ありて、しかも、情厚き行を見ても、阿茶局の人となりを知るに足りぬべし。

大坂の軍起りし時、阿茶局の力を以て、和睦を帶びしことは、前巳に之を說きたり。此時兩軍は猶戰をやめず、矢丸の飛ぶこと雨の如く、いと恐しき有様なりけるが、阿茶局は黑金の籠乘物に乘りて、此間を徃來して、いさゝかも恐るゝ色なく、かよわき女の身一人にて、をゝしくも敵の城に入り、滔々たる辯舌を揮ひ、遂に說きふせ

て、君の命を全くせり。阿茶局は啻に才德あるのみならず、また、絶代の勇氣あるものといふべし。辨舌も、また、是に於て大に尊ぶべきなり。阿茶局が君の命を奉じて、和睦を說きたるは、今の世の生意氣なる女子が、演壇に上りて、徒に嘵舌を弄するものぞ、同日の談にあらず。

寛永元年、といふ年に、秀忠公の御娘、立て中宮となりたまふ、東福門院と申し奉るは、即、是なり。此時、秀忠公、阿茶局に命じ、門院に從ひて京に上りて、大禮を行はしめたまふ。朝廷には、その勤勞を賞して、高き位をさづけたまふ。大禮とどこほりなく終はりて、局、還り來りけれど、秀忠公いたく喜びたまへりといふ。かくて、寛永十四年正月廿二日といふに、此名譽ある烈女は、高齡を以て、此世を去りぬ。知る、知らぬ、惜みなげかぬはなかりけりとかや。

阿茶の局の如きは、才あり、德あり、勇あり。洵に類稀なる烈女なりけり。既に、夫につくす道は、間然する所なく、君に事へて、また能その職をつくせり。女子の能事、是に於て畢れりといひつべし。

左崎幸右衛門の女　　桑名妻子

京極備中守高豊朝臣、讃州丸亀の領主弓組の足輕岩淵傳内と云へる者、常時婬酒に溺れ放逸を事とし、同役左崎幸右衛門が妻の艶色を戀慕ひ、或夜幸右衛門の他行を伺ひ、押行きて種々の淫語を述べ戯れ居る所へ、幸右衛門歸り來り之れを見て大に怒り不禮者覺悟せよと聲掛られ、傳内少しも擬議せばこそ、拔手と見せず一刀に幸右衛門を切倒し、逸足出して逃去けれ、妻は無念とばかりに、脇差拔て追掛しが及ばずして、投付け肩に中けれども、彼れは遂に命冥加に、踪晦まして消失たり。頃は十一月末の事とて、闇の夜なれば、行衛たづねんすべもなし。妻は悲歎にくれけるが、親族來りて取片付、此趣高豊朝臣へ訴へければ、役人ども相議しけるは、傳内は妻子を持ながら、人の妻に不義を云掛、其夫を殺すといふ事、言語同斷なり、尋出して刑戮に行ふべし、又幸右衛門妻子は、妹聟關根元右衛門方に引取て扶持すべしと、扶持料を給はりける。其後同役ども相議りて、相應の養婿を取るべきよし勸めしに、妻肯かず、私故に幸右衛門も相果たれば、再縁は決して致すまじ、娘とよ事は、皆様を御願申て、生育の義頼みまいらすとて、元右衛門方に母子ともにかゝり居しが、妻

は愁情止む時なく、翌年四月五日、遂に病死せり。娘は纔に三歳叔母の世話にて人となり、漸々十三歳に及びしとき、名を改めてりやと呼べり。りや元右衛門夫婦を實の父母と思ひ暮しけるが、夫は或時りやに向ひ、其方幼きに依て、今迄は聞せざりしが、我等は汝が實の父母にはあらず、叔母夫婦なり。汝が父は、左崎幸右衛門と云ひ、汝二才の時、同役岩淵傳内に殺され、傳内は行方しれず、汝が母之れを悲み、常に男子ならば成人の後、敵傳内を討べき事もあらんに、女子とて詮方なしと語り歎きしが、遂に病となりて、翌年二月五日といふに、空くなり給へぬと語りければ、りやは驚き大方ならず、誠に左様にもや、然らむ私父は、非業の死を致され、母も之れを憂ひて、空くなり給へりとやそれともしらず、御二人様の御惠にて、成人いたし候事、御厚恩いつの時よか忘れ申すべきと、さめ〳〵と打泣けり。既にしてりや十八歳に及べりしかを、夫婦の者へ、唯今迄の御厚恩をも顧みず、申もいかがなれども、私事江戸へ出で、奉公いたし、二三年も過なば、兩親の爲、秩父三十三所の觀世音へ參り、志願をかけ、女なりとも御利生にて、父の敵傳内を討度願ひに侍るといへば、夫婦驚き女の力にては、中々及び難き事なりと、一向留めしが承

引せず、然らば、其方が志に任すべしとて、其比同家中、村瀬東馬と云る者、江戸詰になり、元右衞門心易き人なりけれど、此人に委細を咄し頼みける程に。東馬も尤と諾ひ伴ふて、江戸に趣き、出入の町人を頼みて、番町の邊に住居する、旗下永井源助といふ、貳百俵どりの家に奉公せり、此の永井氏、劍術の師にして、門弟も多く、業も繁昌せしかど。りやは大に喜び、大切に奉仕せしに依り、主人夫婦深く憐み、子の如く慈愛せしが、或日りやに向て、其方は奉公初めての樣子なれども、手跡といひ、起居擧動といひ、田舎者には最珍し、定めて由緒有人の子なるべし、包まず咄し聞せよかしとの詞に、りヤは有難き御意をかふむり侍る。私は讃州丸龜の城主、京極備中守殿足輕、左崎幸右衞門と申者の娘にて、父は私二才の歳、同役岩淵傳内と申者に討れ、傳内は行方知らずなり。母は憂事におもひて、翌年病死いたし、叔母の養育に成人して、十三才の時、叔母の物語に、事の始終を承り、夫れより父の敵を打度存念にて、叔母に暇を乞ひ、御當地へ參り候へども、一向に手掛もなく、旦暮殘念に侍りと、涙を流し語りける。源助夫婦つく〲と聞き、深く其孝心を感じ、然らば隨分心安く、敵を討せん。先劍術を敎へんとて、夫れより每日稽

古させしに、一年半ほどにて、大抵は熟錬せり。源助悦び、今は敵に會ふとも差支へなし、是より主人を取替、多の人に出合、心を付て尋見るべしと、暇を與へぬ。りやも深く悦び、源助の厚情を拜謝すること數回、遂に此家を立出で、後主人を取替取替、三年の間に、主人を取替ること、七十人に及び、最後に本所邊の旗下坂部安兵衛といふ、四百俵取の家に奉公に出しが、此家には若黨一人、中間男女四五人あり、さて其の若黨は、小泉傳内とて、年齡五十餘なれども、大酒呑の元氣よき男なり。或時酒の醉に任せて、若き時の手柄咄を誇貌に說出し、種々物語せし中に、我等若き時は、男一疋人におとらぬ者なりしに、妻子ある身を以て、若氣の至りとは云ながら、主ある女を夥多だましすかし、此上なき樂みと思ひ居しが、中に情強き女も在ればあるものにて、然る一人はいつかな我心に從はず。夫と知らせて事むづかしくなりしまゝに、是非なく其夫を切殺せり、此の事、昨日今日のやうに思へども、今考へ見るに今年迄既に廿二年とはなりけらし。氣の毒なるは其の親妻子、我故追放せらるゝと聞く、是れのみ今に至りては、不便なりといふ。りや胸にこたへ、猶備に聞屆んと、種々工夫の上、其の身の上を問しに、傳内いふやう、今迄人には

叫さねども、年も經、國も隔ぬれバ、知る者もあらじ。我れ元來は、讃州丸龜の足輕、岩淵傳内といふ者なり、同役佐崎幸右衛門といふ者の妻故に、事起り、幸右衛門を討て立退、探索を憚て隱れ忍び、名を小泉傳内と改めしが、今は絕て追跡の沙汰もなし、幸右衛門の子もありしが、慥女の子と覺へたり、畢竟若氣の無分別、年寄となりて殘念なりど、片肌押脱ぎ、右の肩に疵あり、幸右衛門の妻が投の刀の疵なり。りや大に悦び、直に名乘て討んと思ひしが、いや仕損じてはよからずと、心をしづめ、立歸の暇を主人に乞ひ、源助の方へ行て、委細を告しかば、源助も亦共に大に悦び、りやを同道して、村瀬東馬が方に到り、相議して公廳へ訴へ、御下知に從つて敵討すべしと、乃ち東馬より、事の次第主人備中守へ訴へければ、備中守甚く其の孝心を感稱ありて、公廳に達しけるほどに、坂部方若黨傳内日を移さず、傳奏へ召され、りやと對決せしめられ、傳内遂に逐一白狀に及べり、此に於て公儀より、備中守へ引渡され、其方下屋敷において、勝負いたさすべしとの命なり。依りて傳内を受取獄屋に入れ、備中守役人共へ申されしは、りや事は諸人の鑑ともなれば、奥の女ども、及び家中の男女にも、見物せしめよ、又他の者なりとも、望の者

には見物いたさすべしと、即下屋敷に、十間四方の虎落を結び、期日を定め、撿使の役人、徒士足輕、嚴重に守衛し、禮式古法の如く、東馬はりやの介添として出、りやは傳内に一禮し、鬪に及んで、暫く勝負も決せざりしが、一念凝たる女の精力、遂に首打落して、亡父の靈に手向たる其の働き、見る人皆喝采稱嘆せざるはなし。其の後備中守、深くりやの孝勇を感じ、息女に附人とせられ、局となりて名を永井と改めしは、永井源助の厚情を、終身忘れまじき、高豊朝臣の芳志とぞ聞へける。

記者云、此の條近代の事なれども、知人少きは、遺憾といふべし、諸書にも載せず、たゞ女武勇集といへる書に見えたり、依て摘載して、其の行狀の顯揚せんことを希ふ。

漫錄

雛祭

井上頼文

昔は三月三日を上巳の節供といへり。たゞし漢にては、此月初めの巳の日を上巳と云たれど、魏よりこのかた用ゐしにより、皇國にてもそれに習ひしなり。この日、公事にも、曲水の宴といふ事あり。そは王卿など、御前にて詩賦の興あり、又御溝水に盃を浮かべて文人以下飲酒し。私事には、酒に桃花をひたしてこれをのめば、百病を除き、顏色を益すなどいへる、本文によれるわざもありて、俗には桃の節供などゝもいひ、又禊祓をなす事もありしかど、皆漢土まねびのわざなれどもて、今は用ゐぬ事になりにたり、たゞ婦女子の雛をもてかしづく事は、昔も今もかはる事なし、紙

ひゝなは徃古の質素なりし姿をとゞめ、今世の内裏雛などいへるは、次に盛りになり來りしたくみのほどもいちじるかりき。彼源氏物語などによれど、いつとなきかしづきぐさなるを、此三日を雛祭りともいふやうになりしより、此ものはかの禊祓の具の人形になすらへしなりとも、又はかけんもかしこき、伊弉諾、伊弉冊の二神を祭れる事の餘波なりなどもいへる説あれど、今たしかにはいひ定め難し。そはともかくもあれ、此日をむねとして、上中下の人々、そのほど〳〵に云たがひいつきかしづくわざのなまめかしきには、おのづから婦女子の心ざへも見ゑて、さく花のもゝ世もかけて捨てがたきならはしなるべし。ちなみに今雛人形の

圖數種を擧げて幼きひめたちに見せまゐらせん。

古製さつま雛

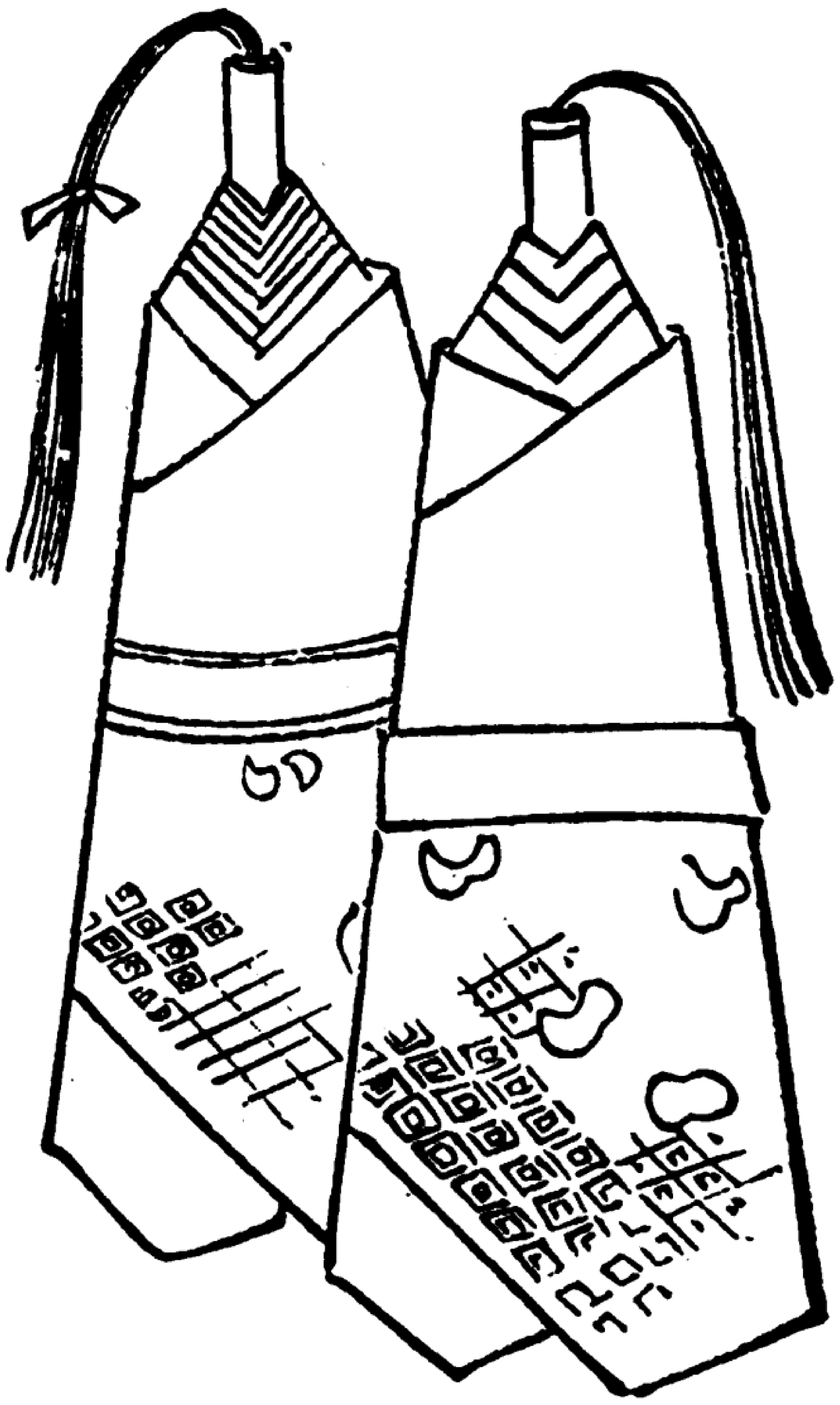
男　女



現今さつま雛



同　男　女

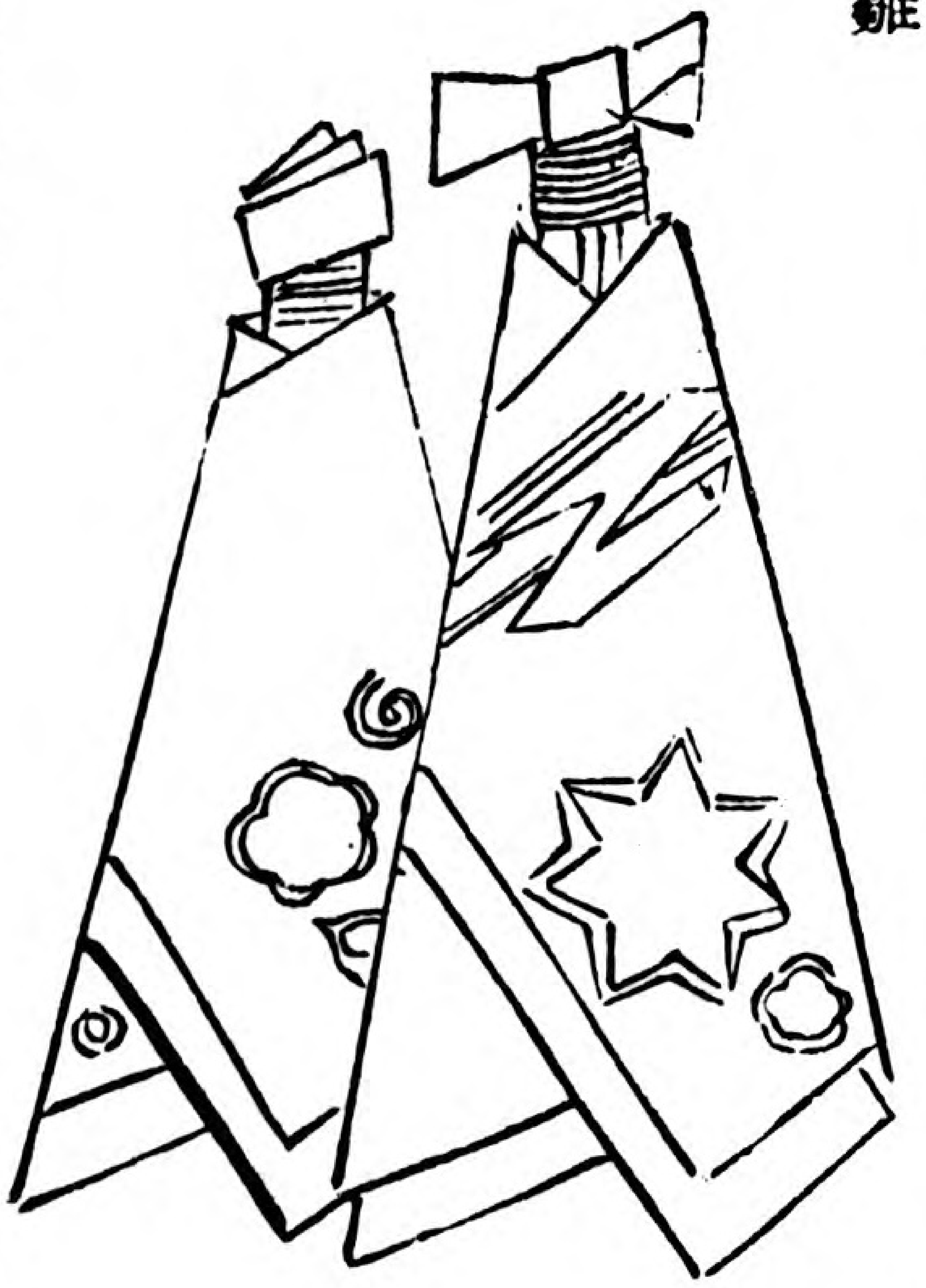


加賀の國の雛　煉り物製



琉球の雛

男　女

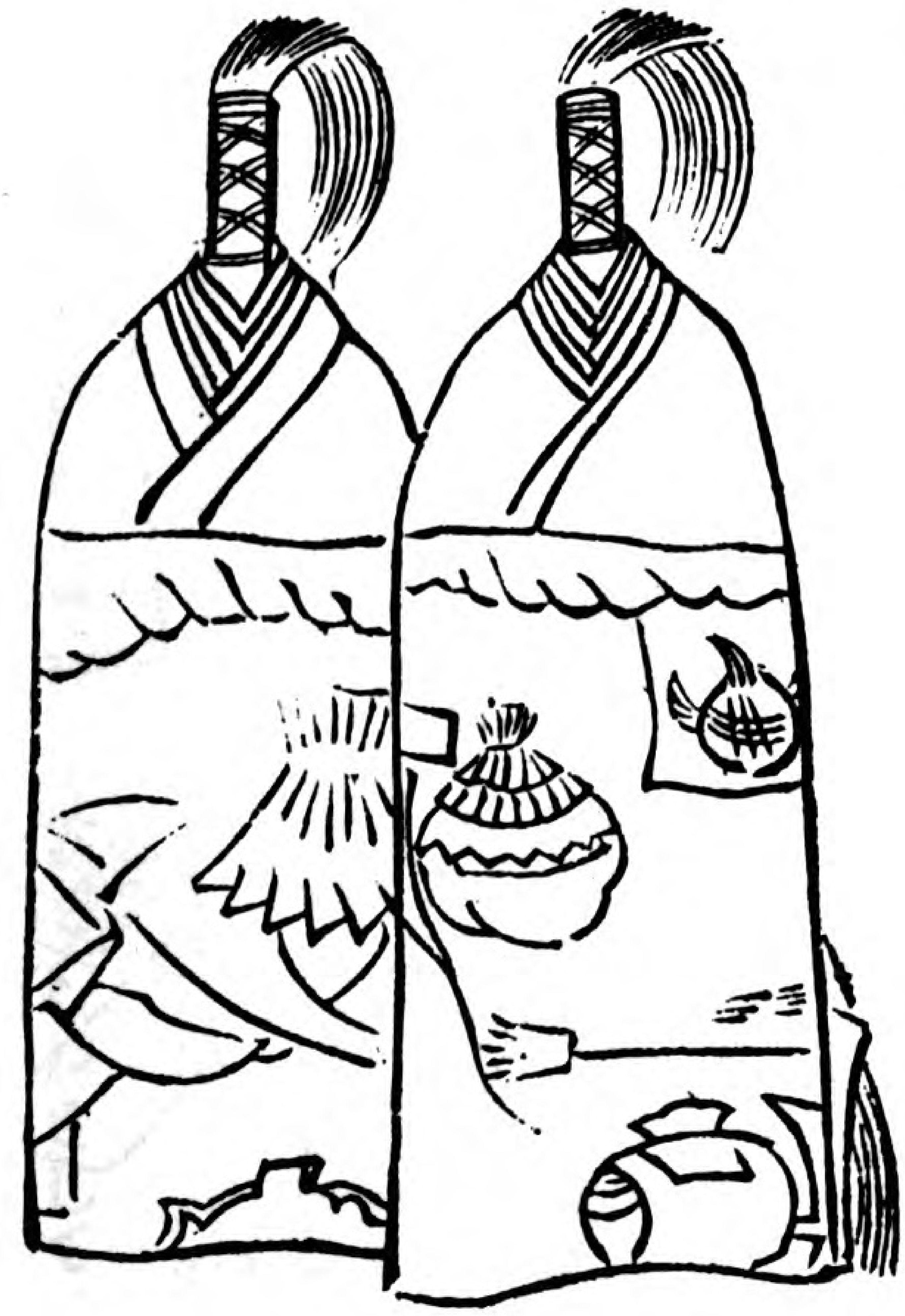


大和國吉野郡の雛



さつま糸雛

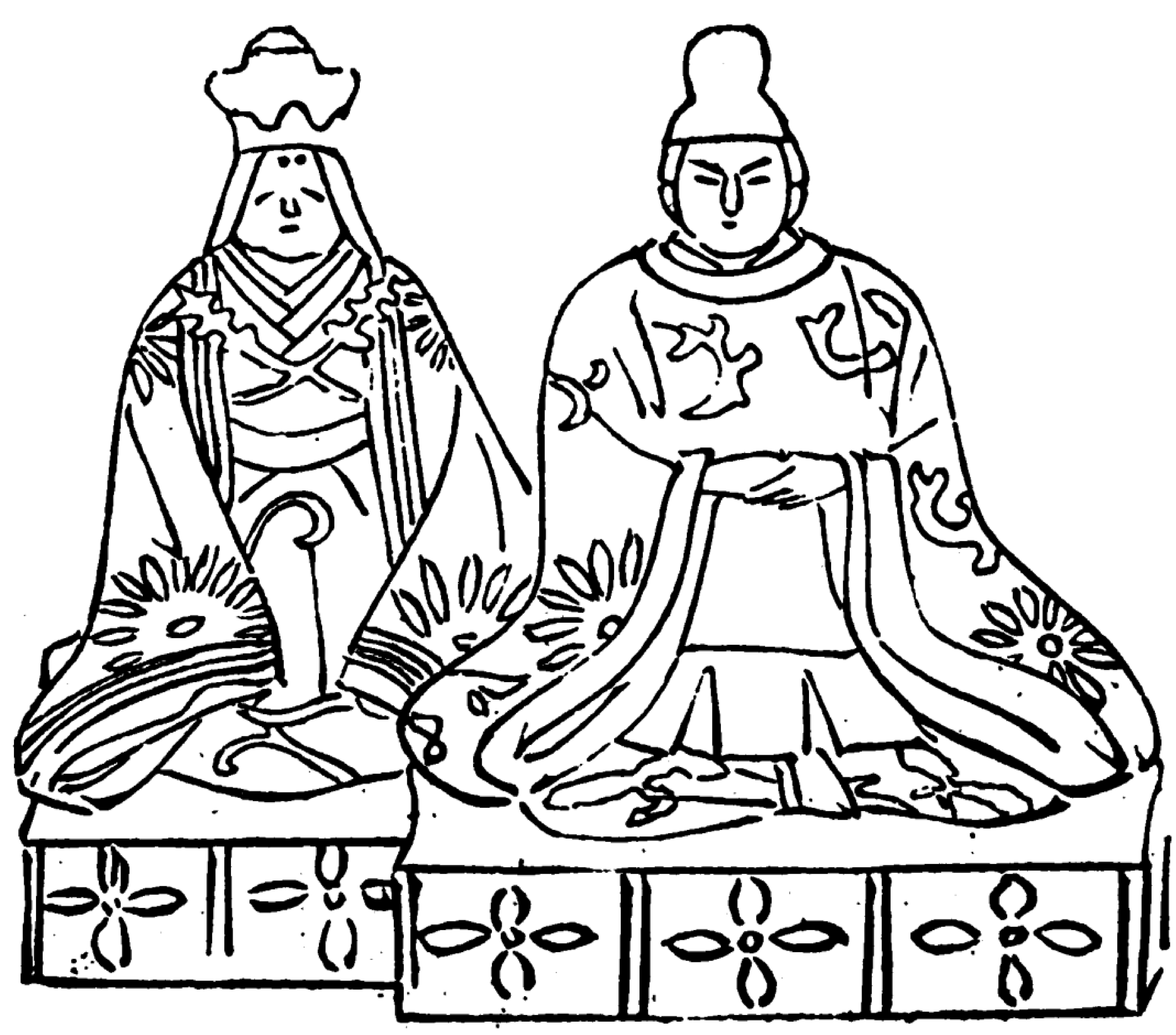
男　女



昔尾張三河地方にて九月九日にかざりしといふ[illegible]子雛又後の雛これなり



古製伏見燒の雛



江戸淺草の產木彫着色の雛



筆

横井知萬多

筆よ、われ汝が族に親しむこと〻に二十年。おもへば、始めて汝を見たるは、わが漸く這ひ得る頃なりしが、その折はいまだ其名をだにえしらざりき。まして、汝がかく晝夜わが傍をはなれざる忠臣ならむとは思はざりき。其後二年ばかりを過ぎて、汝が名を知ると共に、汝を用ゐることをえりしかど、いまだ親しき中らひならざりき。さるを、われ七歲の折學校に入りしに、わが父母は、汝をしてわれに從はしめき。されど其折は、わが幼きをや蔑しけむ、はたわが至りふか〻らぬにてやおりけむ、思ふ如く從はねば、われは腹立たしさにふかく、汝を硯の海に沈め、又笞刑に行ひ、墨壓の罪に處せなどして、ある時は、汝の首を失ひて販る折もありしかば、汝の爲に父母にいましめられたる事もありき。後漸くわれになつき、われも亦一日も汝がわが傍を去ることをこのまざり

き。かくなりては、ふかく汝の祖を虐待せしを悔いたることもありつれど、さむすべもなかりければ、其悔ゆる心は、せめて報は汝にと、ひたすら汝を愛したりき。その心をやさとりけむ、物こそいはね、汝もわが思ふまゝに從ひき。たまたまわが病みふして、傍なる汝を用ゐることもえさりし折は、汝はわが弟妹の手につかはれて、口をしともおもはず、わが思ふことをなし卒へたりき。後われは父母の國を去りて、遠く遊ぶ折、戀ひ慕へる弟をも妹をも見すてつれど、汝のみは伴ひたりき。われ旅にありて窮したる折は、汝は殊に我が爲に力を盡し、其身の碎くるをも惜まず、われに食を與へき。われある時、汝の頭のいたく傷はれ、汝の身のいたく煤けたるを見、涙をのみて汝を愍れび、若干の金を得るに當り、やがて汝を退隱せしめ、汝の子を新らしく取り立てたりき。此間に汝はわが意をうけて、三百里外の彼方なる父母故舊の許に使し、はた遠き外國まで往かしむるをも、つゆ恨めしとは見えざりき。されど、汝の爲に、父に師に叱責をうけたる事もありき。されどわれに代りてことをいひとき、師父にわび、師父をなだめしも又汝なりき。又事あるに當りては、汝は我に從ひて、つゆ身を惜まず。一日の間に、汝が族あるは傷けられ、あるは斃るゝこと、幾何といふ數をしらざれど、なほわれに從ひて、つゆ後れをとらず、主なるわが休ふ時にあらざれば、汝も休ふことなし。はた今日のみは心安しと思ひてふしたるに、霜さゆる眞夜中ともいはず、わか眼

さめたる時には、ふたはりもなく汝をも起したりき。われふかく其勢を喜ぶ。この喜ぶ詞も、なほ汝の力によらざるを得ず。實にいみじきは、汝の力なるかな。昔唐土の某は、汝の族を封じて管城子となしき。われ未だ幸なくして、汝に其勢を報ゆることを得ず。まして、世はいよいよなほ事しげくなりて、なほ汝を安らかにおくを得ず。汝それこを恕して、今日までの如く、なほわが代とともに、常にわが忠臣たれ。われはたゞ汝の族をたのみて世にたゝむのみ。

歌に六義といふ事

本居宣長

歌に六義といふことぞ、やむごとなきことにするは、いと愚なることなり。六義はもろこしの國にて、上代の詩に、さだせることにてそあれ、歌にはさらにさることなし、歌にいふは古今集の序に、歌のさまむつなりとて、その六くさを分て、あてたるよりおこれる事なるを、そはかのもろこしの詩にならひて、六くさには分たれども、さらにかなはぬことどもにて、そへ歌といひ、なずらへ歌といひ、たとへ歌といへるなど、此三つは、皆同じことなるを、かの詩の六義の名どもに、あてむとてしひて分たるものなり。又いはひ歌を、此うちに入たるもあたらず、もしいはひ歌をいれむ、戀歌、かなしびの歌などをも、いれずはあるべからず。そもそも此古今集の序は、すべて歌のことをぞ、よくも尋ねずして、たゞもろこしにて、上

代の詩の事をいへるを、そのまゝにとりて、書ること多くして、歌にはさらにかなはぬことがちなる中に、此六義は、殊にあたらぬことにしあれぞ、深く心をいれて、とかく論ふは、やくなきいたづらごとなり。もろこしにて、詩のうへの六義だに、さまざま説有て、さだめがたきことなるに。いはむや歌にうつしあてゝは、いかでかよく、かなふやうのあらむ、いはゆる古注に、おほよそ、むくさにわかれむことは、えあるまじきことになむと、いへるぞ、よくあたれる論には有ける、此一言にて、六義の論はつきたるべし。(玉かつま)

田沼意次の夫人

松崎堯臣

田沼氏の婦人は、黒澤氏の息女なり、すぐれて仁慈にして、學問を好み、常に卓により書にむかひて、朝夕の樂みとし、また歌をもよみ、手なども拙からず、世俗の節曲などは、取あつかふ事もなく、容色衆にこへ、夫婦むつまじく、田沼氏のしばしば奥へ入らるゝに、かりにも又退出の衣服を脱るれば、侍女これをたゝみおさむるに、かならず手づから一つはたゝみて、これを納められしとぞ、侍女をつかふにあやまちありても、とがめず、そのものゝよく心得るやうに、いとやはらかに云聞せ、詞も常に敬口ありしとぞ、或時髪とる女の、ひそかにさし櫛銀笄を竊て懐に入けるに、

折ふし婦人髪結せんとて、化粧の間へ入らんとせられしが、彼女のさまを後より見付、其まゝ立歸り、しばし有て來たり、髪を結ばせて出られけり、かくて彼女局に向で驚たる氣色して、二種の見へざるよしを告ければ、局これを婦人に申ければ、本よりわれこれを知らず、小さきものなれば、取落して置失ひたるもしれずとて、尋ねよともなかりしとぞ、半年ばかり經て、局伺ひけるは、時も春には人の出かはる節なれは、引替申べき人も有なんや、御くしにかゝる誰かしは其儘おかるべしや、また出し申べきやと申ければ、答に云、君これを留め置もよかるべしと思はれなは、そのまゝ置て給はるべし、若此ものは我爲にもならず、かえてよきと思はゝ、引かへても君が計次第とありしかは、さあらは出し候はんとてひきかへてけり、かくて十日經て後、物語りの序に、婦人局に宣ふは、去年秋櫛具のうせたりし時、此もの懐に入たるを、化粧の間にいらんとして、うしろより見たりしが、事あらはれては彼か名のたち罪となるらん事故に、さてしらぬよしにて過したりとありしとぞ、局は女君の幼稚より終にあらはして、人の非を咎められし事なし、ゆへにわれらもあやまちあるものをぞ、ひそかに教て改さするゆへにあそと語りしとぞ、かゝる婦人の近世に聞さる事なり、二十歳あまりにて、産後に死去なりしとかや、をしき人にこそ、婦人懐孕ありし時、夫君の枕上の友なくてさひしからん事を憂ひ、妾をおいて、しばしのつれ／＼を慰めんとて其旨を夫君に告て、

侍女一人おかれしに、とりあつかふもの其よしをいはず、つねさまの仕へぞとおもひて仕へしに、ある夜夫君その閨に入て、まめやかにかたらんとありしに、侍女おもひよらずして驚ろき、初よりさやうの事も存ぜずして參り候、かゝる事を親など承りては、妾奉公いたし候事をとがめ申べく候、仰を背く罪深く候得共、御ゆるしありて給り候へと、くれ〴〵云ければ、夫君ことわりなりとて、事なく歸られけり、さて侍女は、君の仰を背きて候へバ仕へ難し、退き申べきよし申遣れバ、初めよりその事とも知らで仕へしなれバ、他の聞へをはゞかりぬるはことわりなり、さらバ常さまの侍女とせん、其儘仕へと、二君ともにしひてとめられしかども、重き仰を背き、そら恐ろしく仕へ難しとて退きけり、これらの如きも、他のみだりなる人とは、大に異なるにあらずや、

(窓のすさび)

安養尼幷惠心僧都の事

横川惠心僧都の妹安養尼上のもとに、強盜入て、有ほどの物具、皆取て出ければ、尼上は、紙衾といふものばかり、引着てゐられたりけるに、姉尼のもとに小尼上とて有けるが、走り參りて見れバ、小袖を一おとしたりける、是おとして侍る也、奉れとてもて來りければ、それを取て後は、我物とこそ思ひつらめ、主の心ゆかぬ物をば、いかゞきるべき、いまだ遠くはよもゆかじ、早〳〵もておはして、とらせ給へと有ければ、門戸の方へ走り

出て、やゝとよびかへして、これをおとされにけり、たしかに奉らんといひければ、盗人ども立とまりて、案じたる氣色にて、あしく參りけるとて、取たる物ども、さながらかへし置て、歸にけり、惠心僧都、金峰山に正しき巫女有と聞給ひて、たゞ一人行向ひ給て、心中の所願占へと有ければ、歌占に、十萬億の國々は、海山へだてゝ遠けれど、心の道の直ければ、つとめていたるを、こそきけと、打出したりけれど、涕泣して歸給ひぬ。

（十訓抄）

涙の雫　三篇の家

緑ふかき松の一本、いと淋しく生ひたり。その松の下に三尺の地藏、佛さびて立てり。其地藏のかたへにさゝけき庵あり。ふり積る雪に埋もれはてて、筧のしつくの露おとなふものもなし。あたりあたに見過しかたくて、やをらさしのそけど、庵の主十六七にもやならむと覺しき尼君一人、心細き燈のかげに行ひ居たり。みめかたち優れてらうたく、はた心ばへさへやさしう美しう、ほのかに見え渡さる。いかにもの申さむと門叩けば、燈をこなたへ向けつゝ、いさ給へとてせうし入れぬ。床には佛像をかゝけまつりて、御經机には讀みさしたる御經なとも其まゝあり。さて、けふ來し道の物語なとしをはりて、いかなれはまた春淺き御身の、かくは名殘なくきりはらひ給ひしぞと問ひ出つれは、尼君はかへす詞も胸に詰まりて、唯墨染の袖をしほりにしほるのみ。さては何事のありて

か、かくはおはしますらむ。あはれ其ゆゑよしを語り聞かせ給へ、さ哀しみ給ふとて事のわくよしもあらざるべしなど、様々に問ひ慰めしかは、尼君も今は包みかねけむ。いづくいかなる御方にか、かくも哀しき涙のもと、告け參らせむもいとゝ恥かしけれど、かはとまで御心ふかくの給ふものを、告け參らせねも、なか／＼に心なく侍れば、いざ一通り物語し侍らむに、あはれ暫が程きゝ給はれかし。妾は幼き程に、父母に引れまつりて叔父君に養育せられたり。兩親の臨終に、いひなづけたる夫といふものありて、杖とも柱とも大船の如く頼み參らせしか、願ふことは餘處に、頼むことはあだとなりゆく世の習ひこそいひ甲斐なけれ。其夫と頼み參らせしは、ふとせし事より叔父君の怒にふれさせ給ひて、此春はかり家出してけり。心あたり殘る隈なく尋ね參らせしかども、絕えて行ゑは白雲の、いつこの空に迷ひますらむ。御姿の見えぬのみか、それと思ふ手掛りさへなくなり侍りぬ。今はこの世にましまさぬなめり、と心ひとつに思ひあきらめしが、風の吹きあるゝ朝、雨の降りしきる夕などは、殊に忍びいでられて、夢の間も露忘れ侍らざりしを、さる程に叔母上の親しき許より、おのれをものせむといひ入りぬ。叔父上かしこみて許し給へり。そを聞き侍りし時、おのが驚きはいかに、おのが哀みはいかに、既に定まりつる夫もある身の上なるを、其夫の生死さへわかぬ折からなるを、いかにしてかさることのなし得べからむ。あはれ、妾が心の中をくみ給ひて、此こ

とむかりは單に免させ給はれてよと、命をかけて賴みまつりしもいかゞはせむ。叔父上も叔母君も、さいふは理ならむ。されど、汝の夫と賴みしは、旣にこの世になきものなり。世になきものをいかに戀ひ忍ぶとてよしなからむ。まだ年若きものゝ、この後いかでか一人身にて過し得べからむ。いで親しき中なれど、こま〳〵に諭され給ひて、おのが願は許させ給はずなりぬ。その時の妾が心の哀しさ、其折の妾が身の苦しさは、又いかにぞや。父上母上臨終の御言葉さへ、今猶耳にありつるものを、いかでか其御言葉にそむき參らせむ。よしや夫君は世にましまさぬとも、一度婦と定まりしからは、いかでか再び他に夫を求め參らすべき。さはさりながら、叔父上叔母君とても、おのが爲とて取計はせ給ひしものを、其御心の深きにも、またいかにして背き參らせむや。思ひわぶればわぶる程、賴み少なくなりぬれど、浮世の事の何となく厭はれ侍りて、今は父母の菩提、夫のなきあとをも弔らはむとて、緑の黑髮もたちおろし墨染の衣を身に纏ひて、人も稀なるこの山里に草の庵を結び侍りぬ。稀には尋ね給ふ人もありつれど、よしやそれとも答へかねて唯一念に佛に仕へまつり、朝夕に香を燒き花を具へ讀經し奉りて、心を慰むる身にし侍れど、思ひかへせどひとゝ猶昔の忍び出でられて、世になき父上母上、さては夫君の御姿さへ、今まのあたりに見ゆる心地せられぬ。あはれはかなきわが身の程を御察し給はれてよといひさして、又もふりそゝぐ其あつき涙は、

雪中の寒氣にも猶こはらざりけり。おのれも涙せきあへず、さても哀の物語をきくものかな。年淺けれど情深き御身の御心は、父君母君、この世ならずとも嬉しとおぼしめすらむ。又御身の貞操の程は、夫君天かけりましても、あはれと見そなはしまつらむ。あはれ畏き御身かな。あはれ貴き御心かな。君が御心根を推しはかりまつるさへ、悲嘆はいとゞやるせなけれども、こもみな前世の宿縁と覺しあきらめてよ。そして君が故郷といふはいづこにておはせしや、御家も御名も猶つばらに語り聞かせ給ひてよといへば、尼君はいよゝ堪へがたくて、落つる涙をかきはらひて、今は何をか包みまゐらせむ。妾はもと松本の藩士の女にて、妾の姓は小松と稱へ、父の名は勝良と呼び侍ると、

こはいかに、日頃朝な夕なに思ひ出でゝは露忘れもやらぬ、ふりわけ髮の幼き友垣、しかも諸共に、春は野邊に花を集めあひ、夏は河邊に螢を逐ひかはし、秋の夕は同じ窓に雲井の月をかこち、冬の夜寒に机並べて手習ひせしこともありける其友垣ならむとは。誠に思ひがけなや。こはめづらしや操子殿といひ出でしに、幼顔はさすが忘れもし侍らず。さては家釜様の御子君にておはせしか、御見忘れ侍りし罪、ひとへに免させ給へ、さても〱、珍らしき人に逢ひ參らするものかな。といひさして、堪へずやありけむ。墨染の袖を顔におしあてゝ、故郷にてかたみに袂をふり分ち侍りしより、春秋の移り變はるにつけ、花の朝月の夕、月にも花にも物事の唯なつかしうのみ過ぎ侍りし

ぞ、絶えて久しき友垣に、ゆくりなくも巡り遇ひ參らせしものかな。嬉しきことの限なり。この嬉しきにつけても、かゝる淺ましの姿にて、遇ひ侍ることぞ、かへす〴〵も口惜しう、いとも〳〵恥かしけれ。御二方樣を始め、御妹子貞子殿にも、今猶恙なくおはしまさむや。と涙ながらにいひいでしかど、おのれもそゞろ涙にむせびつゝ、あはれ君ばかりなさ嘆かせ給ひそよ。おのれも其後父母に別れまつりて、あぢきなき浮世の憂きことのみ身にふり積り、晴間なき袖の露、乾かすよしもなきを、妹ことは、もの學ばせむとて、東都なるある師の君許へ遣し置きたりしが、こも去年の冬、はかなくなり侍りて、今は唯おのれ一人のみ、世に遲れたる甲斐なさよ、御察し給はれといひさして、兩のもろ袖もしぼりあへねど、尼君も袖は涙に朽ちはてゝ、いかに常なきを世の習とこそいへ。あはれ世が世ならむには、御身もみづからも、諸共にかゝる憂目は知らさらましものを、思へど思へは、實にはかなき世なりけり。實に甲斐なき身なりけり。とてよゝとばかり泣き出だしぬ。おのれも今は堪へかねて、諸聲にさけびしかども、暫ありて又思ひ直し、何事も憂き世の常とあきらめられよ。花の咲かぬも春たゝねどなり。嶺の深雪もいつか解くらむ。現世かく侍れバとて來世またうるはしき春あらむ。されどそを待ちえて、諸共に咲き匂ふべき折もあらむ。この世の苦みは却て後世の樂みといふこともあれバ、さ嘆くには及バしなど、彼是といひ慰めて、不思議の對面に理

火の炭かき起しつゝ、さえこほる冬の夜寒も打ち解けて、かたみに昔を問ひ。問はれつ、其夜は終宵かたりあかして、猶あかぬ別なれど、例の限ある身とて暇を告くれバ、尼君もさむかり留めさせ給はず。何れ暇あらむ折々は、又々尋ね參らせむ程に、朝夕の寒さ凌ぎがたき折から、萬いとはせ給へといひのこせど、尼君も雪ふかき深山路の程、心して歸られよといひ送りぬ。尼君はし近ういでて、猶も見送らせ給ふ。折れめぐる山路のくまに立ちとまりて、顧みする折しもあれ。深山おろしひえ／＼と身にしみまさりて、心なの雪さへちらちらふりましへぬ。忽ちかなたは見えずなりぬ。こなたもすなはち見えずなりたらむ。これなむ過きし年の冬のことなりける。あはれ、かの尼君、かの友垣、今いかにかしけむ。思ひいてゝは涙の雫。

すゞろ錄

つたの舍　橋本丹江

或人のいはく、本朝にて幼女をすべて娘といふ、父母あるものは、長幼通じて娘と稱す、娘の字は何の義ぞ、いはく娘の字は孃の俗字、後世の文字なり、いにしへは少女を號して、孃といふ、今又娘の字を製して、通ずといへども、中華にはなべて、婦女の通稱に用ゐる、又男にも、娘といふことあり、陶九成のいはく、子謂母曰娘、世謂穩婆曰老娘、女巫曰師娘、都下及江南、謂男覡又曰師娘、娼婦曰花娘、達旦又謂草娘、苗人

謂ㇾ妻曰二天娘一、南方謂二婦人之無ㇾ行者一、亦曰二天娘一、謂二婦人之卑賤者一、曰二某娘一、曰二幾娘一、鄙ㇾ之曰二婆娘一、といへり、かくのごとくなれば、今日本にいふ所と、すこしく以て、大にことなれるのみ。

世ぞくに、人をいやしみて、くそといふ、是いにしへの詞なり、古代には何となく、つかふと見ゆ、源氏手ならひの卷に、いゝつかくそたちとあり、又人の名にも、名づけられたりと、貫之のわらはは、名を内敎坊阿古屎といへりと、

古歌に

今こむといひしはかりをいのちにて
まつにけぬへしさくさめとしと

このさくさめのとしとは、姑女の事なり、文字には丁年と、かくともいへりき、又としは刀自とかきて、刀自女は宮女の稱號なり、刀自は、老若に通じていふなり、さて右の歌は、婿なる人の今こむといひて、久しくこさりけれど、むすめの母のよめるにやあらむ、

鬼女を俗に磐若といふ、般若はこれに翻して、智慧とす、般若に觀照般若、實相般若、文字般若など、の差別あれど、いづれも智慧の事にて、鬼女の義、たえてなきなり、ゆゑに近ごろ人のせつに、古の面うちに、般若といへる名工ありしが、鬼女の假面にわけて、たくみなりければ、終に鬼女をさして、般若といひきと、いひつたふるものもあれど、面打ちに般若といふ、名工ありし事、古今きゝもおよはず、これ全く意を以て、杜撰せるにこそあらめ、謠曲の葵の上に、あらくおそろし

の般若こゝろやといふ文句あり、これは鬼女が大般若經を讀誦せるこゝろを、おそるゝといふなるに、かへりておそろしの詞を、誤解して、般若こゝろを、鬼女の聲とおもひて、鬼女を般若といふことになりきと、北山先生かたられき、さもこそあらめ、生母にあらずして、子を養育する母を、まゝ母といひ、生子にあらずして、養育をうくる子を、まゝ子といふ、そのまゝは、養育の義にて、小兒に乳を飲付くる、今の乳母のことなり、これをいにしへ、ちゝつけとなむいひし、東かゞみに、佐殿乳付の青女を召さるゝ事あり、麿々と號すとあるによりて、去るべきになん、これより轉稱して、小兒の乳をのむを、まゝといひ、今にては、飯を喫する事まで、まゝといふことになりけりき、

或書に源氏蓬生のまきに、こまゝのゝたまひおきしこともあり、云々、浮舟のまきにもまゝといへる所、三ところぞかりあり、細流にうはの名のごとく釋したまへるは、たかへりや、足軒の抄に、めのとをた、おしなへて、まゝと名付くるなりといへる、是かなへりける、さらでは物かたりの中にても、きこゆかたきところあり、

花ふゞき

塩井雨江

その十二

よしありての浦住居と、語り出でたる翁が言葉。さはこそ故ありげと思ひたれど、御息所も賤機も、ひとしく彼方をうちまもれば、翁は、そゞろに過ぎ来し方の思ひ出られて、感慨に堪へぬもの〻あるにやあらむ。二度三度嗟嘆して、今更に新しう云ふも、益なき物語りには成り候へど、きゝたまへや上臈たち。か〻る身も、徒らに風月の興に、世を見かへての雅男のはてにも候はず。又は、はかなき白雲流水の身を、思ひさとりての隠士の終りにも候はず。祖父なる代までは、都に住み候て、其の上は、北面ともいはれたる武士の末葉。はや百歳あまりの昔に成り候が、承久の一歳、かしこくも、上さま、倍臣づれの暴政を御憤りあらせられ、鎌倉御征討の御令旨下したまふや、祖父なる人も、討手に召し加へられ、宇治橋のかためをうけ賜はり、錦旗を岸に押し立て候て、寄せや夷ども、一歩も渡すべきかはと、弓づるの限り、またゝかに射立て候へど、敵は次第／＼に勢を増し、遠く野の邊に、近く岸

に堤にみちくて、雲霞のごとく押寄せたるを見て、年月遊惰に流れはてたる京武士ども、はや氣も心も奪はれはてたり。大君のため折角思ひたちながら、進みていさぎよかるべき決心なく、汚くも右往左往に、一支えも支ゑず。塵と亂れて大敗北、心ある百騎、二百騎、名ををしむ一將二將、橋のたもとに踏みとゞまりて、奮戰したれど、決河の大勢をいかにせむすべなく、みなぎるばかりの敵軍を、せきとめむよしもなき無念、涙を嚥みて、大刀と共に仆れたる忠臣義士。六月中旬の雨後の空、漫々たる河水の、徒らに激するのみ。

祖父なりける人も、いさゝか恥ぢを知りたる者なりけれど、一歩もひかず、同じ岸に、武士の名をとめて歸らず。關東勢は、直に都へ亂れ入り、九重の雲井をさへ動かす暴威。月卿雲客、野に斬られ、山に捨てられ、無殘なさけなき亂世となり、宮方の殘黨、せん議の嚴しければ、祖母なりける人も。落人となりて、此武島にさすらひつき、難を逃れたるは、翁の父なる人が、十歳ばかりの頃なりけるとか。

祖母なりけるも、武士の育ちなりけれど、朝夕、北條を恚り給ひて、臨終にも、よしや武士の家なりとて、北條の旗下になつきぞとの一言。父なるも、庭の敎を守り

て、遂に孤島の海士となり、又、都城のわたりを求めず。翁も、父が志をうけたれど、鎌倉の旗下には、武士とならぬ所存。此婆も、祖父が同志の末葉。此處に思ひがけなき緣を結びて、海士の小舟の、おなじつなでの友となり、藻屑が下の苫屋がくれに、埋れはてたる此の年月、忘れむと思ふ世にしあれど、唯くちをしく忘られぬは、一人りの男子。なまなか大刀業を好みて、直ぐなる武道を知らず。弓矢の家門に生れて、徒らに魚屑に交る事を、心外の耻辱と思ひ、北條の手下なれ、鎌倉の旗下なれ、武士は武名を以て、世に立たむこそ、願ひなれとて、いつか家出して、久しく行方知れずなりたるが、飽くまで父母祖々の戒を侮り、遂に北條に仕へて、筑紫松浦一面の主となり、去年の春、父母を迎へむとて、狀をもたらし、人を送り來したれど、おのれ畜類めが、松浦一郡もて、父母を賣らんとするかと、狀を引き裂きて、追ひかへしやりたるが、此頃の京鎌倉の合戰、必ずや、不忠の弓矢たばさみて、宮方に射むかひてあらむ。これが翁の一生の無念のみ。いかなれば、かゝる心の外の子や設けたりけむ。露ばかり天道にそむきたる事、おぼえなき我身なるをと云ひつゝ、はら／＼とこぼす熱涙、兩手にかきはらひて、婆や、おれが七生の仇は、





五郎ぞと、無き名をかみての無念。

賤機は、翁の物語りをうちきゝて、密に驚きたるは、松浦といひ、又五郎といふ名なり。かの尼が崎の旅館に討ち入りたる狼藉者、慥に松浦五郎といふ聲きゝたり。しかも、彼れが御息所を奪ひて、漕ぎ去らむとしたるも、築紫への船路なり。思ふに、必ずや、かの時のにくき曲者は、此の翁が子にて、此の朴直なる翁夫婦は、必ずや、かの曲者の親にてあらんと思ふに、怪うなる緣の、うち驚かるゝばかりなれど、なまじさる事いひ出でゝ、かばかりにやさしう赤心を盡くしくれたる翁夫婦の、悲嘆を添へむは、誠に恩義を知らぬに似たり。よしや、尼ヶ崎の難義、其の五郎故なりといひたりとて、既にあひたる禍の、去るにもあらず。すぎにし人のかへるにもあらず。唯、かなしき翁夫婦が悲しみを增すのみ。さは、たえて云はまじものぞ、うちあむじて、けぶりにも出でず。なかなかに、夫婦が常ならず心細げなるを、何となう慰めきこゆなどし、又、何をか思ふらむ。賤機はかなたにうちむかひて、さては、よき機會のあらむまで、なほ、しばし、かくて御情にあまへまゐらするなり。さはいへ、徒らに磯邊にあらんも、海士の子の思はむ事の心苦し。明日よりは、翁が

營みの業に伴れさせ給へ。せめては、後の物語りに、舟漕ぐ技にても、習ひ侍らむといへバ、翁はうち笑ひて、やうなや、やみたまへ。此の婆さへ、今も人なみに漕がぬを、御身はどの上臈が、いかにかならむ、うちおき給へと、笑ふを、賎機は、なはあながちに頼むに、翁も、さは心にまかせ給へとて、はては、から／＼とうち笑ふ。

賎機の心、もとより徒に徒然を慰めむと思ふにあらず。かくて、自ら舟やる事をおばねなバ、如何にもして、舟を求めて、自ら土佐へ渡らむといふ心なれバ、それより、日毎、翁に伴れ立ちて、海士の業に立ちまじり、汐にぬれ風にふかれ、緑りの黒髪も、玉なすかんばせも、昔の容色の見まがふばかり、うつろひゆくを、人もいひ余も見れど、更に惜しげなるけしきなく、ひたすら心をこめて習ふものから、僅に一月ならで、はや七十歳にあまる年月、取りなれにし翁も、及バぬばかりの技を得、ありつる水師さへ、驚くバかりになりぬ。

賎機は、今はと思ひて、志しの程を、御息所につげ奉れバ、御息所は、唯、有難き心やぞ、うれし涙にくれ給ふのみ。さらばとて、翁夫婦にも、決志の程をきこえ、い

かならむ船にても、一艘めぐみたまへ、土佐へまゐりつかばいかにもして、必ず償ひまゐらせむとて、思ひつめたる烈婦の一念、今度は退くべきけしきなければ、翁夫婦も、今は唯其の志を歎称するのみ。自らが船を餞別にまゐらせむ。君の召し給はゞ、位たまふより、我が船の面目ぞといひ出でぬ。ありつる水師も、今更上臈たちを捨て奉る心あらじ。是非に御供まゐらせむといふに、賤機の悦び、たとふるにものなく、御息所と諸共に、着たる衣の中なる一重を、形見とて翁夫婦に残し、数多度其が恩義をよろこびきこえ、そが好情を謝しなどして出で立てば、翁夫婦は舟まで送り来り、幾度か別れをつげ、幾度か袖を絞りて、なほ名残り惜しさの盡きぬものから、今はとて舟を出せば、翁は磯に下り立ち、嫗は岩に取りすがりて、さらば上臈たち、さきくませ、恙なくおはせといふ聲さへ、涙になりて見送れば、舟なる御息所も賤機も、岸をうちまもりてはては舟底に沈みて泣きなどす。波も心づからや、頻りにうちかへして、舟は進まず。

文林

長閑なる日濱へにいづ　毛利　元徳

のどけさにそり立にけり今よりは
濱なやつまんかひやひろはん

鍋島　直大

寄波のまふきにふれてそてはかと
みるこゝちよきはるの濱つら

高崎　正風

面白きこゝろのはてもみえぬかな
かすみをあさる濱のとはあさ

前田　利嗣

貝ひろふあまのをとめに打まじり
あそぶのどけき春のうみつら

前田　利鬯

あまの子に交りてわれも打かすむ
春のいそべにかひやひろはん

水野　忠敬

昨日けふ春の日かげのゝどけきに
ともうちつれてはまの遊せん

長岡　護美

芝はまにうち出てみればあはの山
あはともみえぬ春がすみかな

宮地　厳夫

はてもなく楽しき物はうらうらと
かすみ濱へのあそびなりけり

小出 粲

今一つよきかひえんとひろふまに
はるかになりぬ歸るはまじは

坂 正臣

いそさきの松の春かせふき絕へて
貝ひろふ子かそてもかへらす

植松 有經

うらうらとかすみはたりて艤出し
舟もうこかぬなみのうへかな

大口 鯛二

舟ならてかへられぬをて汐みちぬ

近衛 榮子

大いそのまつ吹かせものとかにて
はまへにたえぬみやこひと哉

前田 朗子

波の音もきこえぬ春のはまつたひ
すゝろありきのおもしろき哉

柳原 愛子

いつく迄汐はひぬらんみるめかる
はて祉みえぬはまのまさこ路

保科 節子

ひろはははや梅の花かひさくらかひ
かすみわたれる濱つたひして

小池 道子

櫻かひひろふはまへのまさこみち
はるは野山にかきらさりけり

北島 以登子

海はらはかすみわたりてさくら咲

しまねをめぐる舟もみえけり
三島　竹子

うつせ貝うつゝともなく拾ふまに
日は入にけりはるのなみまに
小笠原艶子

八百日行はまへのまつも風たえて
かすむ春日になりにけるかな
保科　寧子

しほひかた貝拾ひつゝはるの日に
沖へとほくもいでにけるかな
原田蒼生子

磯さきのまつのこかげにさくら貝
ひろふあかみも打かすむらん
石丸　忠胤

鶯

うつり行世には習はてうぐひすは
むかしながらに名のる古こゑ
高田　顕允

鶯遅

うぐひすの心なかさをいかにせむ
梅のさかりもはとすぎにけり
松岡　調

春月

花におかぬなげきや空に棚びきて
月はおぼろに見ゆるなるらん
勝家　貞昆

早春月

たちそめしかすみの衣うすければ
またはださむし月のよのつき
酒井　喜妍

雪中車

たかのりし車なるらんひくうしも
なかえもしろく雪のつもれる

雪中梅　　　諏訪　晴子

梢みなふりつもれども雪のうちに
なくねうもれぬうくひすの聲

水邊柳　　　三輪田眞佐子

玉しまや岸のあをやぎめもはるに
水のおもさへけむりそめつゝ

弓　　　岩下　豊子

弓矢もて外國ぐにゝとゝろきし
やまとごゝろはたゆまざり鳬

初春松　　　園生　[illegible]子

よる波のおともかすみて住の江の
松にのどけきはるはきにけり

日出山　　　安東　菊子

立さわく波よりいててなみの上を
のどかにてらす朝日かげかな

折紙鶴　　　橋本丹江子

をとめこかてにとりわけし白紙を
つるにをりしもやさしかり鳬

宮城　　　横井知萬多

或時は民の烟をのぞみまし、宮殿となり、或時は見うらやみて、亂臣賊子に心を動かさしめし壯觀となり、或時は見悲しびて、忠節の士をして、地上に涙をそゝぎて哭かしめし衰況となりたるなど、くさぐゝの歴史をもたる吾　皇の大御城は、橿原の昔より、大和國内は更なり、難波、滋賀、平安の處々に、宮柱を移したて給ひしに、明治の大御代となりて、深く思ひはからせ給ひけむ、彼の

徳川將軍が、上は內裏をはじめ奉り、下は臣民の末々に至るまで、三百年間、あらはに敬し、ひそかに抑へ奉り巧みに威權をうつし用ゐて、萬民の心を收攬し、倒れて後、なほ理なき其當時を、慕ひ思はしむる斗りなつけたる治平の府、江戸の城にうつさせ給ひ、こゝに千代田の大宮をはしめさせ給ひぬ。二重橋の外より遙かに拜み奉れぞ、わつかに其御殿の瓦を仰ぎ見奉ることを得。あはれ、今は殊さらに高殿に上りたち給はずして、四方の國はて〳〵の烟はいかにと、大御心なやまし給ひ、寒夜大御衣をぬかせたまふは、この宮殿にます。又、大極、清涼、豐樂など殿の名は殘りてもあらむ、さばれ、夫の益人數まさりても、一人としていみじきたくみをたばかるもののなきは、固よりさるべきことなりとはいへ、申さば華美をもて事としたまはず、畏さに目はくるめくとも、其もとは金銀珠玉をちりばめ給はぬ、この宮城にます。又忠節の士は國にみち〳〵ても、有がたさに涙こそこぼすもののあれ、悲しさに堪へずして、地上に哭くもののなきは、わが皇の大御稜威、外國までも輝きわたらせ給ひて、自ら光ある、この宮城にます。この大宮城よ、歷史の上に特にかきしるし奉りて、後の世に語りつぐべきものにこそ。あはれ、おのれはかゝる大御代に生れあひて、かゝる大御榮にあふことのうれしさよと、よろこぶ折しも、心ありげに、理の上よりいはゞ、汝も長く恩顧をうけし徳川の舊臣なる、千代田城の上の松風は、ゆたかに大君の八千代を祝ぎまつるに似た

り。

卒業證書授與式

田邊和氣子

あならうたし。あな嬉し。こたひ華族女學校の卒業證書を給はりし、をしへ子の君たちよ、事たらひたる文のはやしは、螢雪の窓のうき事こそなけれ。富士の根おろし寒き日も、土さへさくる夏の日も、いとふこともなくうむこともなく、日ごとに通ひて、いそしみ學び、すべての學科、うるはしくへたまひしのみか、心ざますなをにして、くれ竹のまかれるふしなきものから、霜雪にえはれぬ操をたもち、はた、かたちどもうるはしく、霞ににほふ櫻あれど、雪間に咲ける梅もあり。松にかゝれる藤あれど、汀に咲ける杜若あり。露ふかみ竹芙蓉あれバ、桔梗、撫子、女郎花あり。萩も、薄も咲きそひて、とり／＼あかぬ色香ぞ、又たとしへなし。哀れ、この君だち、世にいでゝ、おのもおのも、男君をたすけ、いとまめ／＼しく、家を修め給へる時、皇國の女の風も、いよ／＼匂ひて。汐路はるけき外つ國までも、吹きつたへむとおもふあまりに、かくなむ。

たましきのをしへの庭に咲きいでし
この撫子を折る人やたれ

夏竹

田邊わけ子

なべての事、おのづからなることよけれど、ほどもなき前栽を、草にまかせて置きけるに、蓬生は、

軒よりたかく、浅茅は、むすふ斗りに茂りあへて、朝霧のこぼるゝ斗りおきたる、中々に、つくろひたてたらむより、見どころあり。ある人とふらひ来て、なぞしもかくやなどいふめる。草とて、いかでか心なからむ、心のまゝに茂らむと思ふを、心なくかりすてなむ、いかにはいなくおもふむかし。木の葉は散るがまゝに掃はず、草は茂げるにまかするこそ、をかしけれどいへども、おやしくも、引きたかへたるすね心なりと、笑ふもまたをかし。

日に添へてしげるまゝなる夏竹を
かぜにまかせてみるぞ冷しき

多辨の弊　鹽井ふく子

ゆく水の盡くる淵なく、よどむ瀬もなく滔々とたゆまずものいひ、言あげする、辨のいとよきは、誠にえがたき一かどの能にはあれど、あまりにさとりがほに、才ありげにいひたるは、中々に心のいたらぬ方にや似たるらむ、五人六人膝をまじへて、ものがたりしたる折などに、おのれ一人すゝみて、とかく人もなげにものいひわめきたる時は、かの轡虫といふ虫のかしがましくて、松虫のやさしく、鈴虫のすゞしげなる、音をもとゞめたらむばかりにおぼえて、誠にあさましく、口惜しく、はてはうらめしく、腹立ちのせらるゝものなりや、鶯すらだにひねもすきゝては、めづらしからずなりゆき、時鳥とて所さらず鳴きなど、いか

でかみぢか夜をねもせで、あかす人のあるべき、ましてやきく甲斐もなき人の、ひとりさへづりたる誰かはうれしときくらむ

雑報

●あはれや兒を棄つる親心　厚衾かさね、火桶かゝへて、なほ、すいまもる夜風をさむみ、歌舞伎のかはりめ、花見のまちどほさをかこつ嬢たちもある世のなかに、さりとは、あはれのはなしのあるもの哉。下谷區入谷町にすむ工人の稲垣次郎吉といふは、八十路にあまる老母をかゝへて、妻おしんとのなかには、十三になる男の子をはじめて、五つ人の子を持つより、夜のめもねずて力のかぎりはたらけども、おのれ一人の力にあまりて、貧神のあゆみのはやけれど、兎かく生活の意にまかせぬがうへに、母はつねに病のとこにありて、醫師よ薬よと物の要るのみなれど、いよゝ貧苦の淵にしづみて、せむかたなきまゝ、かくてあらんより、むしろ軍夫となりて彼の國にわたらむど、うる賃銭もおほくて安かりなむど、心さだめつひに去年の神無月のころ、紅葉そめなす、母や子や妻が涙の時雨を袖にとゞめて、海路はるけき清國へいでたちぬ。後には、月々くらしのものおくゝと

いふをたよりにして、今日あすとまちくらしゝに、霜月しはすとすぎ、廿七の年もくれはて、あたらしき年たつても、何のおとづれだになけれど、一家のこゝろづかひ一かたならず。とりわけ、母は老の身の、あんじ過しておしんにむかひ、かくたよりなきは、おほかた彈丸にあたりしか、かはりし氣候にをかされて病にかゝり、空しく異國の土となりしならむか。次郎は、もはやこの世のものならじといひて、さめ〴〵うちなげけど、五人の子らも、もろともに、父上こひしと泣きさけぶなかにも、三と四の子は、をさな心のつみなくて、父上は、やがてかへり來まさむ。そのをりには、吾らがみやげに、かの國の虎といふもの生けどりてき給ふべければ、兄らへ、それをたのしみに泣かずにまてと、なぐさめ面なるいとほしさよ、そを中にありて聞くおしんがつらさは、胸つぶれ腸もたつばかりにて、みもよもあらぬかなしきを、泣きては家のをさまらじと、こらへて母をなぐさめつ、さあんじ給はずとも、やがてよきたよりのさふらはむ。今はみ雪に道ふさがれて、かく音づれの打ちたえたるにこそ雪路のかよふも今しばしときゝ侍ればと。口にはいへど心には、夫の生死わきかねて、涙のみこみゐたりけり。かくて、おしんは夜を日にこめ、人の裁縫洗濯して、わづかのしろをえ、そをもて口すぎ煙たて、おほくの子らをやしなひ、母の病をみとりけるが、男ありてさへくるしかりしに、まいて女の細きかひなぞかりに、なぞかくらしのたつべき。貧苦いよゝ

せまりて、つひにやむなく、その月のすゑ、同じ區金杉町四十九番地の裏や うつりすみぬ。そのころより、母のやまひ日にましおもりゆくに、醫師をむかへんにも、藥をかはんにも、その用意のあらざれば、夜ひるこめて、ちん仕事をつとめんとするも、とかく、すゑの子の二つになるが手足のまとひとなりて、思ふにまかせぬより、おゑんさま〴〵あんじわづらひたるすゑ、むかし、もろこしのなにがしが、母やしなふために子をうづめたることなど思ひいで丶、この愛兒をすてむとぞ、こ丶ろさだめける。

やけ野のきゞす、夜の鶴、子をおもふこ丶ろのやみ路たどりつ丶、こ丶にすてむとしては人影におどろき、かしこにおかんとしては犬の聲におびえ、そこよこ丶よとさまよへど、身にもかへたきいとはし兒を、すつる處のあるべきならねば、なほも、をちこちめぐりゆき、淺草諏訪町にか丶るころは、はや夜もふけわたりて、人の足音とだえたれば、いつまでも心よわくてはかなはじと、とある路次にたちいり、背なる小どもをとりおろして、前にかきいだきぬ。をりしも雲間もれてさす月かげに、をさな兒の面ながむれば、今すてらる丶とも志らずして、すや〴〵うまいすゑあはれさに、目もくれ心さへ、わが子をひしといだきしめて、いかに母のためなりとて、わが子をすつる母親の、世にたぐひあるべかは。はかなきことよ、悲しやと、音を志のび玉の緒のたえなむばかり泣きいりしが、かくてははてじと心をはげまし、をさな子

を、めざめぬやうに去たにおろし、賤のをだまきくり言も、あたりはゞかり口のうちなり。やがて浅草寺のかたをふしをがみ、われら、親子の縁は、浅草寺のあさくさとも、名にしおはゞ、大慈大悲のみ心もて、この子がゆくすゑをまもり、あはれ良き人の手にひろはさせ給へ。南無觀世音と、いくたびもうちねんじ

おやとこがえにしはよしや浅草の
　　佛のちかひたのむなりけり

と一首の歌をかきそへつゝ、やをら身をおこしさらんとせしが、また立ちかへりていだきあげ、よとむかりに打ちなきたり。をりから道をとよもして、車のきたるけはひなれど、見とめられなどあしかりなむと、うしろ髪ひかゝるおもひふりちぎりて、いそぎこゝをたちさりぬ。こゝろなき夜あらし、たえ〴〵になく兒の聲をおくり、てらす月かげなみだにかすみて、朧のひかりさむし。お去んが心のうちいかに。

つきたる命數はせむかたなくて、お去んが心づくしのほども水のあわとなり、老母はあとの月の二日に、世になき人のかずにいり、かへらぬ旅路にいでたちたり。お去んはなく〳〵なきがらををさめ、ありあふ調度うりはらひて、やう〳〵野べのいとなみをおしぬ。そののちは、晝はひねもす、ちんしごとをはたらき、夜は佛のまへに、四人の子らとともに誦經して、なきおやの俤をしのび、また夫のうへをかたりて生死をあんじ、すてし子のことをおもひでゝ涙にむせび、衣手のかわくひ

まなくて、あぢきなき世をくらしゝが、このほど、おえんが兄なる人のたづね來て、はなしのすゑ、をさな子のあらぬをいぶかしみて尋ねたれど、かくすによしなくて、實をかたりあかしゝに、兄の人おほいにおどろき、そは上の掟ををかしたるにて、もし、さきよりあらはれなど、罪ことにふかしと、いそぎ、おえんをつれて名のりいでたり。警察のつかさたちも、やうすをきゝて、そゞろにあはれをもよほされしが、をかしたる罪はせむかたなくて、とりえらべのうへ、檢事局といふにおくらせ給ひたり。あとには子らが、たゞ泣きふしをるのみなれど、あたりの人々かなしがり、うちつどひて心づかいをるとなり。あはれ世の諸孃よ、なくべき涙あらバ、このあはれなるおえんがうへに泣け。惠むべき財あらバ、すこしなりとも、このあはれなる子らにめぐみたまへかし。

●奇特の婦人　貧しき中にも、なりはひのいとまゝもて、礒におりたち海苔をとり、その數の百にみちたるを鵠沼療養所の患者におくりたる婦人あり。いかにも奇特のものなりとて、同療養所より東京豫備病院へ、つぎのごとく具申せられたり。

神奈川縣相模國高座郡川口村
字江の島德江岩藏母
りう　四十二年

右は原來赤貧にして江島岩窟下り口に富士見亭と稱する床茶屋を營業とし其夫常次郎及び岩藏初め三次郎くら直次郎伊三郎　五人の小供と共に漸く糊口を凌ぎ居候處　今回　戰地負傷　患者

當所に轉地療養を爲す由を傳聞し毎朝營業の餘暇を以て海苔を採收し漸次積で百枚に至るに及んで國恩の萬分一を報ずる赤心を表する旨を以て寄贈仕候事實にして誠に殊勝の行に候間此段特に上申候也

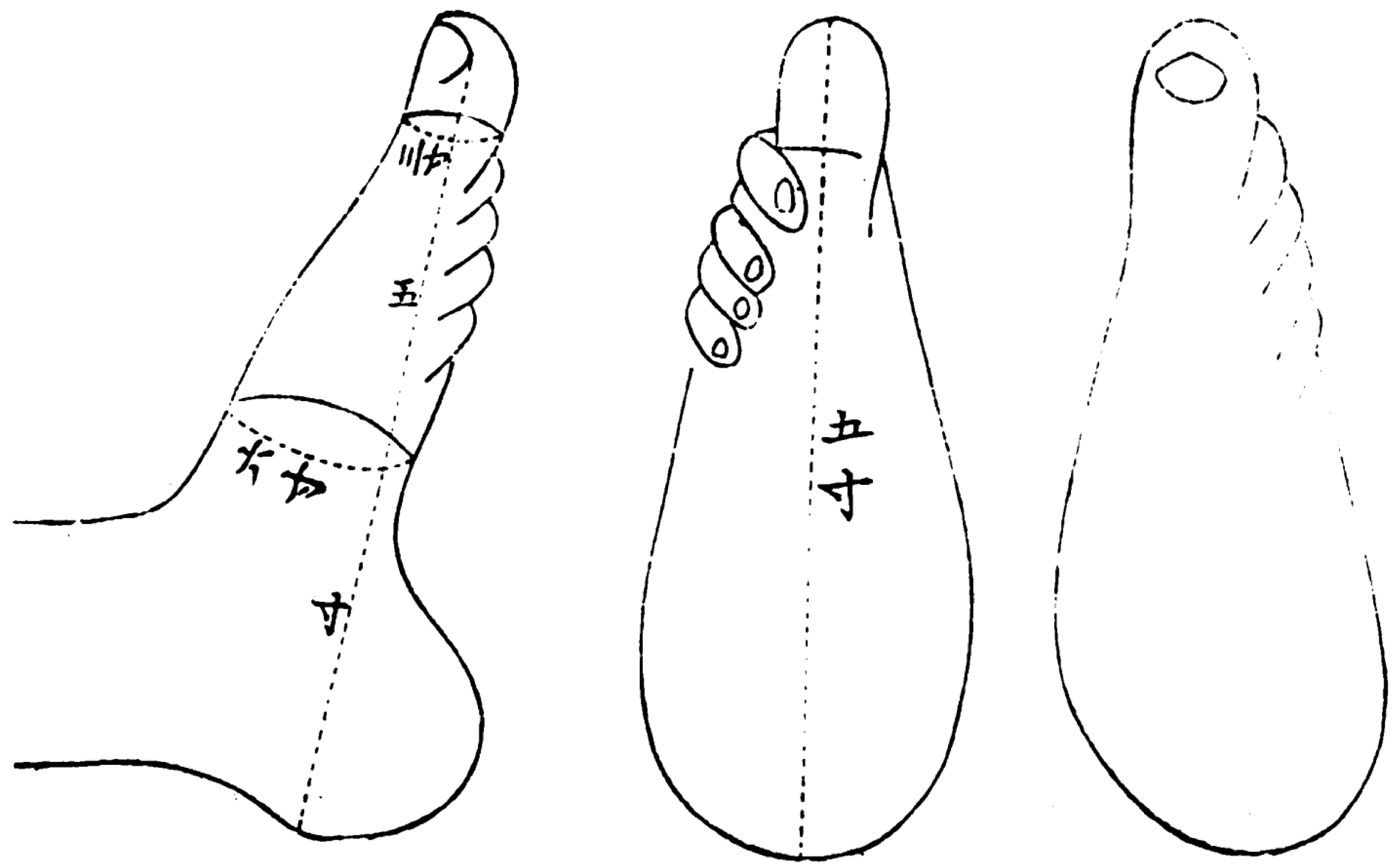
空やう〳〵あたゝかうなりて、春の浦氣色のどけく、嬢たちが春期試驗につかれたるうさ晴すには、いともつれ〴〵しからむ。嬢たちよ、一日のひまをつひやして、江島鎌倉の浦べにあそび、このうるはしき、のどけき、須賀〴〵しき氣色に、日ごろのうさを洗ひたまへ。あそばゞ、江島岩窟のおりと、海士の子らが、逆まく濤わけて水くゞるわたりに、見わたす富士を名にしおふ、螺つぼやく床几茶屋にやすみ、この奇特なるをみなをとひ給へや。

●淸國婦人の畸足形狀

淸といふ國は、むかし楚王とかいふうつけ者が、細腰をこのむとて、宮中に、うゑ死にする女どものおほかりしほどの、愚なる野はんじみたる國なれど、今にその餘風の殘りて、女は、幼きより足を布もて締めくゝりて小さくし、自、たつてあゆめぬ不具となりたるを、したり面なり。まことに、ほどのしれぬおろかさよ。今、軍醫植木弟三郎の君が、かの國婦人の畸足形狀をとりしらべて、しるし給ひ、文をおくれたれど、左にかゝぐ。

淸國婦人の畸足形狀

(一)外形　三角尖柱狀にして足背強く隆起し皮膚薄弱跟骨部甚大にして後方に突出し皮膚の肥



厚著し之れ專ら躰重を負擔するによる足蹠頗る異狀を呈す寫眞は内側に偏して最高度なり

(一)拇趾　獨り固有の形狀を存す其第一節は第二趾に對し深く壓痕を呈す第二趾乃至第五趾は拇趾頭より外踝に假想せる一線上に並列し足蹠に向ひ壓偏せらる各趾端は後內方に向ひ形狀Ｓ字形を呈す第二趾第一節は拇趾の軟部を壓し半月狀の截痕を造り先端足蹠に向て彎曲し殆んど拇趾の半部を回擁す他趾は皆其基根より足蹠に向ひ壓扁せらる故に背面より見れど只拇趾と第二趾の一部を見るのみ

(一)爪甲　は拇趾獨り完全他は僅に其形狀を存し柔軟紙の如きのみ

(一)趾骨　は拇趾を除くの他は皆軟骨樣をなす關

節消失し運動なし

(二)趾端 は深く足蹠に陥入し蹠と一平面をなす趾端を輕く動搖すれバ蹼様の感覺あり趾間皮垢堆積輕度の皮炎を起し頗る惡臭を放つ

支那の女が足をちひさくすると、西の國の女が腹をコルセットもて締め、細きをはたるとは、似わはしき一對の蠻風なり。

●詠草募集　曾て、女鑑第三十一號に、その傳記をものしたる信州下伊那郡神稲村松尾多勢子刀自は、去にし年、夏のはじめつかた、遂にまかられたり。今年の夏、その一周にわたるなり、志ある人々の詠歌をあつめて、そのみたまを慰めんとすといふ。諸媛、おのも〳〵詠草をおくりたまへや。また、その題は、

寄松懐舊

その詠草とゝけ所は、東京神田西小川町九番地三輪田眞佐子刀自方なりとぞ。

●揖取男爵講話筆記 (承前)

女子高等師範學校に於て

男爵 揖取素彦君

さて境遇の廻り目といふ話に至りまするが、皆さんの修業か出來まして、智識も發達致した上には、上流に立たれでも差問はない、又降りまして中等以上の大家に形付られ、彼の世話多いところの家政を預りになつても、差支がない、亦誠に是は學問の上には、立派な成績であります、併ながら官女にならうともいふ御者があれバ、已に制限は解けたる上は、出られぬこともあり

ませぬけれ共、如何にも區域が狹いもので、誰も彼もそこに這入つ　、其列に入らうといふことは、先は望み得られぬことで、さう御座りますれば、私が唯今申す所の上流の次のところの、即良人を助けて、内助といふ事に從事せられ、夫で、御手際の見える方のことが、先區域が廣からふと思ひます、所が、どうも、人の廻り目と申すものは、必善い事ばかりが、あらうでも、ありませぬ、即皆さんが卒業後の良い成績を持つてゐられたと雖、又廻り目に依りましては思ふ樣に往かぬこともあるので、能ろことを、かん忍致すのが同く學問の力で御座りますさういふ場合にも、頓着なく、矢張前日學び得られたる成績を働かして往くやうにありたい事を希望致

します、即世の中の廻り目の盛衰は、自然の道理でありまして、どうも己は是丈の成績もあり、學校にては是丈の功勞もあるに、もう少しは善い位地に立たれさうなものだといふ念もありませうが、さういふところの念を、どうぞさし押へ、是こそ廻り目だから、致方がありませぬ、往けなければ、往けないところで、益、御自分の思想を堅く持つて、品行と云ひ、行狀と云ひ、能婦人の德義を整へられ度ことゝ存じます、元來婦人の德は柔順貞正といふことが第一でありまして、是は皆さん御承知のことでありませう、何事も物柔かにして、ことに正しく致しますることが、婦人方の美德で御座ります、即柔順貞正と云ことを、本になされ、若廻り目の惡

しいところの事に、出逢にせられても、どうぞ、頓着が無い樣に、前に學ばれたるところの事をこゝで能想ひ出し、そこを能行つて御出なさるが誠に學問の成績であらうと思ひます。

全體が女儀と申すものは、人の榮華を羨しがるものであります、尤是は人情の常にて、必婦人方に限つたことでも御座りませぬ、固より我々男子の身の上にもあることなれども、先婦人方のうへに斯う云ふことが有勝である、故にそのその羨やましがるといふは、人が好い衣服を着て居りますとか、簪とか、笄とか、總て髪の飾物が、誠に立派にあつてそれが、目に附いて、自分の身仕度より優つた物があれど、夫をぞ羨ましく思ひ、夫が無ければならぬ、是も無ければならぬ、と云ふ如く成り、追々外面の物に付て、色々と、それを欲しがり、羨むところの念が有勝の事で、あります、遂に其念が增長致しますると、身支度や何かに付け、身分不相應な衣服でも調達しやうといふ考が起るもとで御座ります、之は最誡めねばならぬ古への人の言葉に

服の適はざるは身の禍なり

とも云つたこともあります、人々の支度も、凡身分相當なものが、ありまして、其相當に外つれ、度に、越ゑたる華美を盡すは却つて宜しく無いので、夫故に古人も之を誡めまして、服の適はざるは、身の禍なり」と、いふたこともあります、敎育を受られたる婦人方には、古人の誡に衝き當る樣なことは、迚もあるものでは

無い筈でありますけれ共、其極端を氣遣ひます
る時には、或は必斯樣なことは無きに限つた
事でもあるまいかと思ひます、私は先極端のと
ころから、夫を氣遣ふ者であります、故に一人
の老婆心からして、古人のこの文を引き出して、
皆さんの御耳に入れて置くので御座ります
又モウ一つ事實に引あて申しますれバ當校を卒
業致され、免狀を受られまして、各地方へ招待
になつて行かれませうが、その同學即一所に
教育を受、こゝの一堂に修業をなさつた人が一
は自分の良い都合なる學校へ聘用せられ、一は
土地から、彼是充分でも無い、誰某さんの御出
のところは大きに宜かつたが、私の引受たとこ
ろは、甚思は布なかつたと、いふことも無いと

も云へませぬ、併、こゝが即學問の功能であり
まして、さういふ、所を堅忍不拔と申すこゝろ
にて、勘忍あつてからに、甲の人が好いところ
へ行つたからと申しても、夫羨しいからこゝ
は、まづ是位にして置かうといふて、務むべき
ことも疎かにして置かうなぞといふこゝろが出
萌すと、矢張唯今申しましたところは、人の榮
華を羨む心が增長するに當り、せつかく受られ
ました教育上に害を及ぼす樣になりまする、私
は何處までも、こゝで教育の力を利用して、勘
忍といふ所の御考が必要であらうと思ひます、
一体人を教育することは、實に樂いこともある
もので御座ります古人も
天下の英才を得て之を教育するは、一の樂な

り」といふたことがありまして、皆さん是から業を成就されて、各地方へても派遣になつて、教育に從事してゐらるゝ其中には、必出來る人があるに相違はありませぬ、出來る生徒に於きましても、僻地田舍の差別はありませぬ、丹精をして教育がありまする時には、即教育の下には必天下の英才といふものが出るに相違ない、其人を又お育てなさつて、一方に教育の種子を撒めて参りまする時分には、實に是丈の結搆なことは無い、前の廻り目が充分になくて、土地柄も氣に入りませぬ、樣でも發達する生徒が出て、遂に世上の人に尊敬せられ、譽められると云ふ事になれば、其御師匠さんの顔の良いことは、如何ばかりでありませうか、故にて、

に至りては、其少々場所の氣に入らない位のことは、流用が附く譯になりますから、どうか是等の所を特みに思ひ、勘忍をなさつて、一途に受持つたるところの事は、御辛抱がありますれば、必又他日廻り目が、好くなりて、その結果が見えることであらうと存じまする、又たゝ今の、他を羨むといふことに付て、繰返し、重復致しますやうで御座りまするけれども、或は一方の學友の人は、結搆なところへ片附になりまして、其人のなすところ、總て今日の暮し方を見ても、實に迚も及びも附ぬ、あの人は前日は一所に學問を致し成績を論じたる時分には、格別差別もなかつたに、どうもならぬことである、無念である、矢張其樣なる考が出ますると、婦

人の德義といふものが、それから何はうか、瑕瑾を生ずる譯で御座りまするゆゑ、夫等に付ても、必自分の居る所の位地を守り、我なすべきところの職分を盡しなさるゝ樣に、なつたらば、此上も無いことであらうと考へまするので、是が私は先の廻り目の中等のところに爲ると考へまして、御話をする譯で御座りますから、左樣に御聽取を願ひたいので御座ります、

兼題

三月廿日
- 歌……………早蕨
- 文……………うれしきもの

四月五日
- 歌……………雨後の花
- 文……………春の山ぶみ

教の庭

三月五日兼題　春海邊

天　三河國寶飯郡下地町　永井さい子
海人のたくもしほの煙たちそひて
かすむわしやの浦の〻どけさ

地　長野縣長野町　高野辰子
かれわしもつのぐみ初めて難波潟
浪にもはるのいろは見ゑけり

人　大坂北區相生町　梶井久子
磯菜つむわまがをとめの聲すなり
かすみふきとけ春のうらかぜ

人　肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子
八重かすみ立こそかくせ声きたの
のさかのうらの春のあさなぎ

（天地人のほかは原稿到着順なり）

見渡せる汐の八重路のすゑかけて
かすみたなびく沖つしまやま　奥原ふく子

月かすむ須磨の浦わのはまつたへ
こぎたむ船のかぢの音のよさ　松尾勉子

はのかなる八重の汐路やすき暮し
遠やまかすむはるのあけぼの　平野きみ子

貝ひろふ少女のかげもとほさかり
かすみて見ゆるたけしべの浦　安井章子

廣しまの海邊はるかにたちこめて
かぢの音とほき春がすみかな　住山幾子

伊豆相模春やたつらんわたつ海の
はなれ小しまもかすみ初けり　住山靜子

おぼろなる月こそ浮かべたけ芝の
うらもかすめる春のゆふぐれ　住山せの子

もしほたく煙のどけきはるの日に
海はらとほくたつかすみかな　磯部つや子

眞帆かたほ往きかふ舟もわかぬ迄
しほぢはるかにかすみ棚びく　溝口信子

はる〳〵と春の海はらみわたせば
かすみたなびき長閑かりけり　神田樂子

あさまだき沖の小舟のほかげさへ
かすみにけりな春のうみはら　木村象子

松風のひゞきもたえてうちわたす
うみべしつけき春のあけぼの　神田春子

けさよりはかすみ立つゝしが浦に
行きかふ舟も見えつかくれつ　中島房子

はま松のひゞきはたえてよる波に
今朝は早くもうすかすみせり　島田好子

打わたす海はらとほきしほひがた
むれてをとめの貝ひろふみゆ　楠精子

磯山のはなもにほひてからろ押す
こえもかすめる春のうみかな　師岡千代子

見渡せばいそ山まつの木すえより
うみもみどりにかすむはる哉　千賀しげ子

目もはるに海はかすみて眞帆片帆
行かふふねものどけかりけり　富士野安香子

立こむるかすみの中を行くふねは
こゝろも浪もなぎわたりけり　南淑子

たつのなく松が浦しまうら〳〵と
かすみわたれるはるの長閑さ　大橋てい子

汐風ものどかにふきてさくらかひ
ひろふ春ともなりにけるかな　鈴木秋子

いつこより春のかすみは立くらん
なみたちかへる海はらの上に　橋本丹江子

いひしらぬ景色をこめて三津の浦
難波わたりもかすむはるかな　河野文子

こゝろゆく春の海邊におもふどち
思ひそひつゝあそぶたのしさ　羽田三緒子

豊年のはるのひかりとすめらぎの
みいつかゞやく四方の海邊に　海島信子

さゝなみや滋賀のはま松打かすみ
えだもならさぬ春かぜぞ吹く　木下鈴子

言の葉の玉いろはゝや和歌のうら
わたるかすみの奥をあさりて　木下本子

波たゝぬ海島のどけくあまの子が
いさごを分て千代ぞかたへる　佐藤敬子

うちよするゑらへもすみて春の海
わたりのどけき波のこゑ〲　馬島久仁子

見渡せど沖つしまやまはる〲と
かすみにほふ春のうみはら　植木鋼子

海人の子もみやこの人も交りつゝ
かひひらふなり春のうみへに　青木春子

若芦のもゑいでにけりしほうみの
そこにも春やかよふなるらん　城山時子

波たてる松のかぎりも見えぬかな
かすみわたれる天のはしだて　藥師寺芳子

長閑にも須磨のうらなみたち歸り
かすみそへたつ淡路しまやま　上村高子

時わかぬ春うみはらもはるくれは
かせのまに〱浪のはなさく　名取正代

のどかにも浪路はるかに見渡せど
かすみにうかふ沖つしまやま　池谷粂子

沖つ風いそうつなみもしづかにて
ほの〲はすむ春のうみはら　館照ます子

うちよする波もしづかに芝のうら
かすみわたれる春のゝどけさ　大谷津琴子

あはかつさ夫とも見えずたけ芝の
うら〱かけてかすむ海はら　杉浦糸子

朝なきにしはやく悩りうら〱と
たつも長閑きはるのうみつら　諸井久良子

海はらもくもゝ一つにかすみつゝ
よする波さへしつけかりけり　吾妻ちか子

すみよしはすみよかりけり顔洗ふ
なみのうへにも花はみえつゝ　東原俊子

しほたるゝ衣のすそもはるはなほ
うら面白く見えわたるかな　吉田芳子

はま松のあらしにさえし浪の音も
しらべ長閑になれるはるかな　太田眞子

打よする浪もしづけきうみはらに
こぎゆくふねもかすみける哉　楢村美世子

櫻かいひろひてかへるをとめ子か
そでのうらはに春かせぞふく　落合　操子

たちこめしかすみの奥に見ゆる哉
沖よりかへるあまのつりぶね　吉野　雪子

うら〳〵と礒山とほくかすむ日に
花さくらかいひらふうれしさ　密野　萩子

うなゐらに浮かべる船の數〳〵も
見わかぬまでにかすみ込め鳧　花山保江子

松島のしまのかず〳〵見えぬまで
かすみこめたる春のうなばら　花山　操子

をとめらが春の汐干にかいひろふ
袖もかすみて見ゆるのどけさ　村田喜代子

夕日さす明石の小門をながむれバ
かすみをわたる舟もありけり　村田美都留

礒の邊のかすみと見しはもしほ燒
あまの苫屋のけむりなりけり　本鄕道榮子

嬉しさも袖にこぼれてをとめ子が
うらの干潟にかいひろふなり　河原崎富尾

浪速瀉はるのうみべを見わたせバ
かすみにまがふ沖つしらなみ　久保田りつ子

大礒のまつふくかせのおとなきて
見るめのとけき春のうみはら　甑受　重子

江のしまの春のけしきを見渡せバ
かすみにかくるふしのしら峯　津田　鞠子

春がすみとざす海はらみわたせバ
かすかに見ゆる沖のしまやま　柿本たず子

かへるさもわするばかりに汐干瀉
貝ひろふ日はのどけかりけり　小野田延子

うら〳〵と春の海邊はかすめども
沖ゆくふねはかくれざりけり　大海原芳子

うら〳〵とかすむ海邊を見渡せバ
よせくるなみや春のはつはな　澤田　春子

はる〳〵と沖つ島やまかすむなり
わかのうらわの春のゆふぐれ　德永萬壽子

三月五日兼題　入學を祝ふことば

地

長野縣長野町　太田　貞子

君にはこ度都の女學校に入らせたまひぬとかいともしうれしうなんかねて御さがかしこく在らせられつるをまして師にも物にも足はぬ事なき都の御物學びには定めて御進みの程もしるく侍らんかしされど都の花は色香もわけてうるはしく都の月も影も殊にきよしときゝ侍るをゆめ此花の色此月のかげにうかれたまはでいよゝ學びの道のはてを極め文の林の奥ふかく分け入らせたまひてやがて歸らん日を待ちはべるになん尚折〳〵の御有樣などきかせたまはらばうれしさもこよなうなんあなかしこ

人

千葉縣佐倉町　植木　鋼子

御娘子樣こたび小學校へ御入門のよし兼て幼稚園へ御通ひの折からもよろづにさとくおはしますよし聞ゆ高く承り侍りしが誠にせんたんは二葉よりかんはしとかや承れぞ今より待參らするはいく月を重ねいく年をへてあはれ秀才賢女と世にかゝやき出給はんをりなり乍去幾年の結果は初學の時に有とかいへぞ必らすよ勤勉怠たりなくこゝろみの度毎に譽れあるゆるしのふみを得給はん事こそ願はしくなん心斗りの祝辭まうし上げたくかくなん言葉のなめけなるは偏にゆるし給ひてよ

佐々有隣子

鳥が啼あづまのみさとは櫻なす花の都の名にそむかずあら玉の年ごとに久かたの月ごとに文の林はあやにうるはしく學の場はいやひろく敷舛大和なでしこ露の白玉玄玄にかざし朝は旭の豊坂登より夕は夕日のくだちにいたるもうむことなくおこたることなくつとめいそしみよみときさとりたまよ文の八千まきいやつぎつぎに學の道のおくかを極めたまひ古郷に錦をかざりて柞葉の母ちちのみの父の命の家の風ふきおこしたまふらん今日の入學を妾が心つくしを打あげうたひつれて貴勝をいはひまつるになん

松田　靜枝

うけ給はり候ところ和子様には學齢のことゝてきのふ御入學被成候よし誠に御愛度存候何をがな御祝ひ申さむと存し候かふとおもひつき候まゝ庭の櫻の花一枝爲持御らんに入れ候あはれこの花の外つ國にに匂ひゆくごとく美名を千載に傳え給はん御行末を神かけていのり奉り候かしこ

青木　春子

一筆の亂れがきゆるさせ給へさても此度は高等女學校の入學試驗に應じ給ひ數百人ゝすぐれし成蹟にて入學生の首位をえめ給ひしとかやこれ年頃の御いそしみならぬ功とはいへ誠にこよなき譽れなれ聞え上げずともかしこき性にましませざとくにも知り給はんが只だ心やりに聞え上ぐべし我日の本の古へより定まりし婦の道はなかゝゝにかろきわざにあらぬに近頃女子の學の道に志すものともすれた慢心といふにながれて其身を誤つもの數ありと聞きはべればよくゝゝ心し給ひてひたすら學の道を勵み給ひ行末は高等女子師範學校をも卒業して大御國幾千萬の姉妹が教育の母ともあふがれ天の下に其の名をかゞやかし給へよ先は取あへず入學を祝ひ奉りてかくなんかしこ

日下　とく

うけ給はりぬれば次にておはすひめぎみのけふよりしも小學に入り給ひぬとよ常磐にねさす姫小松千代の榮をおき奉るになんいくつねなば幼稚園にとの給ひしは此はどの事と覺え侍りしに早も其御頃とやげに香ある木は二葉よりとかまたえあゆみ給はぬ頃より御才のほどもなみならず見えさせ給ひつさては御庭のをしへくまなう渡らせ給へれば久方の月の桂も御心のまゝにてと此のちの御心かひもごこそとおしはかり奉りてはあれたる庭の母子草見かへる人もなきかけの今更淺ましうてなんこなたにはまた園にと通ひつるかさすがにあえまちしげに見えつるを親も同じねがひにてけふのつかひはなれにこそとてわざとのぼらせ侍りぬなはもたせつるものは其きみの御榮ぬのるえるしまでになん又この梅よ賤が垣ねにもあるしわすれずさ

き初めたるををかしうは侍らねどふみ好むてよ名にめでゝ一枝折りて奉るになん

吉田　芳子

わこさまこたび學びの園に入らせ賜へるなんいともいともめでたかりけるかねて御性さがしくおはしませバ雨露のめぐみもまたでふかき色香にさき出で侍らんと御察しまつりわけて御家内のよろこびもさこそと思ひやられ侍る私妹はこ年四歳に侍れどわこさまの御入學をいとうらやましく思ひ居る樣子見え侍れどこむ年の春は幼稚園に物せさせたく其節は萬事御みちびき給へかしこの津輕ぬりの硯筥は埋木の硯と共にみちのくの友よりおくりこされたるまゝ御祝ひにまでわなかしこ

降田　槙子

開けにひらけ行く大御代となりては女の敎育もいと進みて女學校の數々多くもの學びする女もあまたありされどそが學校のうちには或はうはべむかかり美しきあり或は西の國ぶりをそのまゝ敷島の大和女に授くるもありまた其生徒おのが才能には

こりて我は顏するあり西洋ぶりをのみまねびて女子獨立などと唱へ英語とやらんを口ずさむなどありていとわびしくかの紫のおもとのめの子をおはしたてんことよいと難かるべしと云はれしもげにと思ひ侍りぬさてこたび君にはかゝるいまはしき類にはあらで内も外もいと美しく學びのおやだちもまめ〳〵しく生徒もいと勝たりとて名も高きそれの女學校にいらせ給ふとよ日頃さえさとくおはする君みかゝるたぐひまれなる學の庭をふみならし給はんには學德二つながら進み給ひやがても美しき花を開きて高きはまれを得給ふらんといとももいともうれしう思ひ侍るあはれをり〳〵の養生を怠りたまはでこの道にいそしみ給はんことをいく重にも仰ぎ奉るになん

いや遠き學の道をふみわけて
花のおくかをたづねこよ君

を治むる爲にましますものなれど、人民ありて　天皇あり。人民なくも、　天皇ましますす必要なしなど、思ひ僻めるものなきにしもあらず。彼の外國の君主の如きは、我が國と違ひて、人民を統一する爲に、自ら立ち人も立てたるものなれど、天下は天下の天下にして、君主一人の天下にあらず。實に彼は禪讓放伐の國なり。我は　皇統一系の國なり。其の國體の同じからざること、嘗に天壤のみにあらざるなり。故に、彼は君君たらざる時は、討ちて之を退け、他の有力の者を以て之に更ふ。我は則然らず、假令君君たらずとも、臣以て臣たらざるべからず。譬へパ天地の位を變へざるが如く、晝夜の時を違ふること能はざるが如し。是に於いてか、倫理の道定まり、百行の基立つ。彼の外國の如きは、君臣の位、常に其の處を代ふるを以て、倫理の道を口にすれども、其の實決して行はるゝにあらず。倫理の大本たる君臣の道にして已に此の如し。況んや其の他の行爲に於いてをや。然るを、西洋に心醉せるものは、皆例之外國に引き、之を以て、直に我が國に行はんとす。是曲れる尺を以て、直き木を計るが如し。其の誤れるも亦甚しと云ふべし。我が國には、我が國の歴史あり。風俗あり。習慣あり。外國と同じ國體ゐ

はあらざるなり。故に我が國は、此の歴史風俗習慣によりて、何事も行はざるべからず。人も亦此の國體によりて、遵守せざるべからず。然らざれば、將に外國と同じく卑しき國がらとなりぬべし。古來我が國の臣民は、大詔一たび下る時は、皆肅然として之を奉じ、まけのまに〳〵服從し奉りしかば、今日迄東洋の君子國と誇稱し來りたり。是より以後も、亦將に此の如くならざるべからず。此の歌には、ものゝふとあれども、必、ものゝふのみに限らず、官吏にもあれ、農商にもあれ、男にても女にても、苟も此の國土に孕まれて、生活する臣民は、皆、此の歌の如くならざるべからず。若、此の意に背くものあらば、即、不忠不義のものと云ふべきなり。

今奉部與曾布

けふよりはかへりみなくて大ぎみのしこの御楯といでたつわれは

しこの御楯とは、醜夷の御楯にて、醜夷を征伐する爲に、天皇の御楯となると云ふ意なり。○しことは、夷人を賤しめ惡みて、云ふことぞ。○一首の意は、此の度、天皇の御命令により、醜夷を征伐する處の任を蒙りたれば、今日よりは、

家をも身をも、父母をも妻子をも顧慮することなく、天皇の御爲に御楯となりて、吾は出立するぞとなり。其の勇氣想像するにあまりあり。武士たるものは正に此くぞあるべき。

國家は、常に太平無事なるものにあらず、まして今日は、海外諸國と、廣く交渉する時なれど、何時、如何樣なる變事の出來せむも計り難し。然る時に當りて、大詔一度下る時は、軍人は云ふも更なり。國民擧りて、戰場に臨まざる事なしとせず。國民たるものは、豫め其の用意なくてやはあるべき。我が國は、古より尙武の國にして、武を以て立てり。三種の神器の中に、劍のあるも、之を證する所以なり。世界に國多しと雖も、未、我が國の如き勇武に勝れたるはあらず。故に國威は、遠く海外に耀き、未、曾て外人の侮を受けしことなきなり。昔より海行かば水づく屍、山行かば草むす屍、大君の邊にこそ死なめ、のどには死なじと云ひ、又、額には矢は立つとも、背には矢をバ立てじなど云ひて、一度敵に向ふ時は、天皇の御楯となりて討死するも、退いて生を全くするを大なる恥とせり。此の元氣は、實に我が國民の特有にして、國家を維持せる基礎なり。されど、古

より犯しはてたる夷だになきぞかし。然るに、今日は、文明と云ひ開化と云ひ、徒に外面の虚飾を旨とし、武事を等閑に附し、次第に文弱に流れたりしかバ、大に固有の元氣を失ひたり。此の如くして止まざらむには、遂に無氣力の人民となりて、外人の爲に壓倒され、二千五百余年傳へ來りし祖先の遺風も、或は失墜するに至らむか、今後の少年子弟は、能く此處に注意して、一旦緩急あらバ、義勇公に奉ずる用意を、おろかしめなしおき、若し大詔一度下る事あらんをりには、此の歌の如く、勇氣を皷舞して、國家を守護せざるべからず。

丈部造人麿

大君のみことかしこみいそにふりうの原わたるちゝはゝおきて

みことかしこみとは、天皇の御命令を畏り承りてなり。○磯にふりとは、磯邊をつたひて行くことなり。○うの原とは、海の原なり。○一首の意は、謹みて、天皇の御命令を承り奉り、父母を故郷に殘し置きて、唯我ひとり出立して、磯邊に觸れて、遙々と海中をわたりて行くことぞとなり。

父母をおきてと云ふ句、忠義の爲に父母を顧みざる處、尤、注意して見るべきな

り。父母は、我を生み我を育て給ひし恩人なれど、尤大切なるものなり。されども、祖先なければ、父母もなきなり。其の第一の祖先の正統を傳へ給へるは、天皇ましませり。而して祖先より父母、父母より我が身に至るまで、安樂に生活することを得るは、皆天皇の御恩なれど、父母生育の恩、海山よりも高深なりと雖も、天皇の御恩に比する時は、大海の一滴たるに過ぎず。故に天皇の御命によりては、家や身は云ふも更なり。父母をも妻子をも捨てゝ、之を奉せざるべからず。出でて天皇に仕へ奉り、退いて父母に事ふるは、忠孝兩全なれども、世の事變に遭遇して、天皇の御命令に從ひ、忠を盡さんとする時は、父母をも捨てざるべからざるなり、世にはさる場合に遭遇したる時には、其の身のある處に從ひて、天皇の御側にあれば、天皇に仕へ奉り、父母の側にあれば、父母に事ふなど、外國流の敎もあれど、我が國の敎は決して、然らず。如何なる場合なりとも、如何なる時節なりとも、父母を捨てゝ、天皇に仕へ奉るべきなり。何となれば、父母も天皇の臣民なり。國家若事あらむ時に、父母も進みて忠を盡さんことを欲すれども、身體老衰して、其の志を成すこと能はざる時にあたり、

子たるもの、奮ひて忠を盡さんか、是父母の忠を兼ねて盡くせるものなれば、父母の滿足此の上なるるべし。されば、假令父母を捨てたりとも、父母は返りて之を喜ぶものなれば、天皇に忠義なるは、即、父母に孝なる所以なり。是人倫の大節にして、行爲の尤要處なれば、須く沈思默考して、此の理を悟るべし。歌に父母をおきて、大君の命かしこみ、遠く海外にわたるといへる意は、實に此處よあるなり。

源實朝

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも

あせなむとは、淺くならむ世の中にありともとなり。〇一首の意は、山は裂くべきものにあらず、海も淺くなるべきものにあらざれども、若しも、其の山が裂けたり、海が淺くなりたりして、非常に變遷したる世の中になりても、我は天皇に對して、二心は持たぬ。假令世は如何樣にあさましくなりたりとも、必一意誠心を以て、天皇に仕へ奉るとの意なり。

飛鳥川の淵瀬の如く、世の中は常に變遷するものなれば昨日まで高貴の位置を占

めし人も、明日は忽薄命の人となり、朝まで富貴に驕りしものも、夕には忽貧苦に困しむものもありて、有爲轉變定めなきものなれども、天皇の御爲と思ふ誠心一つは、如何なる場合に陷るも、此の歌の如くならざるべからず。人は利欲に迷ひ易きものなれども、時として利欲の爲には、忠孝の二字を忘るゝこともなきにしもあらず。かゝるものは、遂に不忠不孝の名を免るゝことを得ざるものなり。中にも、表には忠義の風を裝ひて、裏に不義を働くものに至りては、實に言語道斷の極なり。北條義時、足利尊氏の如きは皆然り。誠心忠孝に在る時は、其の爲す所、假令過まれりと雖も、其の心に至りては猶嘉みすべき處あり。況んや。誠一純粹、たゞ忠の一字によりて、進退を決せし楠公の如きは、今はた何とかいはむ。此の歌を詠せし實朝の如きも亦然り。身は頼朝頼家の後を受けて、鎌倉の將軍とはなり居れども、其の誠心に至りては、一意天皇に忠するより外にはなかりき。然らざれどいかでか此の如き詠歌あらむ。其の甥公曉の爲に殺さるゝことなかりしならんには、鎌倉山の妖雲も、幾程なくて晴れしならんに、惜しむべきは此の右大臣にてこそありけれ。今日の臣民も、亦將に此の歌の心の如く、一身の榮

枯盛衰にかゝはらず、世態の變遷移動に依らず、進みても退いても、立ちても居ても、唯一意忠孝の二字を確守して、たとひ山裂け海淺なるが如き慘境に陷ることありとも、決して其の志を變ずべからざるなり。

中務卿宗良親王

君が爲世の爲何かをしからむ捨てゝかひある命なりせば

一首の意は、數ならぬ我が身なれども、若捨てゝ甲斐ある命にてありしならば、何時にても捨つべし。君が爲世の爲ならば、聊も惜しみはせぬとなり。人の身に取りて、命ほど大切なるものはなかるべし。されども、時によりては鴻毛よりも輕く、泰山よりも重きことあり。其の輕き時と重き時とを知りて、之が處置をなすを肝要とす。如何に命が大切なればとて、死すべき時に死なざれば、死ぬるにまさる耻を蒙ることあり。されども、暴虎の河を渡るが如く、元氣にまかせて向見ずに突進するは、是亦大に卑しむべき處なり。唯其の輕重を知ることは、君が爲世の爲と云ふことを目的とし、標準とするにあり。其の君が爲世の爲と云ひても一身を捨てゝ、甲斐のある時と、甲斐のなき時とあり。如何に君が爲世の爲

と思ひて、一身を捨てたりとも其の甲斐なくば犬死にひとしかるべし。是を察すべきなり。之を要するに、我が命は我がものにあらずして、天皇のものなれば、天皇の御爲にあらずしては、決して左右することを得ず。一朝天皇の御命を得て我が身を犠牲に供しても、甲斐ある時節に遭遇せば、千軍萬馬の中をも物ともせず。身命を抛ちて盡くすべきなり。

中務卿宗尊親王

ありて身の甲斐やなからむ國の爲民の爲よと思ひなさずば

一首の意は、我が身の此の世の中に生れ來りし所以のものは、唯安樂に一身を保持するが爲にあらず、則身命を擧げて、國の爲民の爲に。心を碎き力を盡さんと思ひなさずば、此の世の中に生きながらへて居ても、其の甲斐はなきならんとなり。

人の此の世の中に生れ來たるは、果して何の爲なるか、必詞を云ひ、物を見、音を聞き、五穀を食ひ、衣服を着、手を動かし、足を運ぶばかりの爲の動物にはあらざるべし。若然らむには、鳥獸虫魚の如くして可なり。何ぞ必しも知識と云ふ

ものを要せむ。已に萬物に勝れたる智識を備へたる以上は、何か益に立たざるべからざるものなることと明なり。然らば則、何の爲に生れ來たるものなるか。曰はく。君の爲國の爲になり。人々各、其の知識、能力を活動せしめて、造化の神の造りおき給へる萬物を實地に應用して、之を以て君に仕へ、之を以て國を謗るべき爲なること、言を俟たずして明かなるべし。然るに、世には何事を爲すこともなく、或は惡しき事を働き、或は遊逸に流れ、或は酒色に耽り、一生を終るもの鮮少にあらず。此の如きものは、實に世の贅物にして、生きて居る甲斐もなきものなり。折角萬物の靈たる人間に生れて、其の甲斐もなくして死なんこと、恥つべき至ならずや。されば、人間と生れたらんものは、如何なる人にもあれ。必君の爲國の爲に、我が身は此の世の中に生れ來たるものなることを思ひしりて、各其の業務を勵むべきなり。此の歌には、國の爲民の爲とあれど、國の爲は、即君の爲なれた、君と云ひ國と云ふも、同じことゝしるべし。

藤原師賢

思ひかね入りまし山を立ち出でゝ迷ふうき世もたゞ君の爲

征清軍紀念碑設立廣告

今回大阪府下河内國讃良郡飯盛山下四條畷別格官幣社贈從三位小楠公社地内ヘ征清軍紀念碑ヲ設立ス有志ノ諸君ハ陸續御寄付アランコトヲ

一銃劍ヲ模シ高サ五丈トシ中空ノ鑄造ニシテ全部ヲ金箔塗リトナシ表面ニハ征清軍殉公之紀念ノ八字ヲ鐫刻シ礎臺ハ花崗石ヲ以テ組立テントス此ノ經費建築概算ハ一萬四千圓

一成功期限ハ本建築ノ難易如何ニヨリ長短ノ別アレトモ二月ヨリ起工シ五月三日小楠公五百五十年祭迄ニ竣成セントス

一賛成金ハ可相成本月中ニ御寄贈有之度事

明治廿八年二月

發起人　西村捨三

賛成人　辻新次　西澤之助

事務取扱　森敬一郎

本事務ハ東京々橋區築地二丁目廿一番地國光社森敬一郎取扱候間御書通ハ同人ヘ宛御差出被下度候

女鑑第八十一號目次

〔明治二十四年八月八日内務省許可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小作替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に代用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直ちに女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に郵稅御送の附事○未納稅の郵書は一切受取不申候事

女鑑

毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無郵稅
廣告料五號字廿三字
詰一行金二十錢

明治廿八年三月十七日印刷
同　年三月十八日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）